

關東時代

三三三

(山本地震の内幕成立事情)

村上貞一氏著

政界纵横録

東京市日比谷公園 市政會館內

後藤新平伯傳記編纂會

電話銀座 (57) 四〇〇二二九〇〇六二一
振替口座東京六一六三三番

(非賣品)

浪人時代

第二次內務大臣時代

政界縱橫錄

自序

日本は今や闔國を擧げて艱難の境に臨みつゝある。内治外交は行き詰り、國民生活は窮迫し、思想は刻々惡化し、教育眞に興らず、産業濫りに疲弊し、國歩方に岌々乎として危き狀を呈してゐる。此の國難を救濟せんことをするには實に一代の辣手に待たなければならぬ。是れ著者が平素夢寐だにも忘れ得ざる所である。著者は茲に於て過去數年に亘り、故原敬、加藤高明、後藤新平、山本權兵衛諸氏等と接近來往し、何人が果して此の多艱の政局を救ひ得るの人物であるかと云ふことを深く考究したる結果、その政治的手腕に於て、山本權兵衛伯が最適任の人物であることを信じ、過去七八年間に亘りて、努力奮闘遂に漸く山本伯が内閣組織の目的を貫

徹することを得た爾來居を内閣書記官長官邸に移し
著者は山本伯をして有終の美果を收めしめんが爲め、
各方面の樽俎折衝に力め、伯亦た前古未曾有の多難な
る政界に處して、一大辣手を揮ひ來たらむとせるに、時
偶々不幸にも、不測の變事に際會し、その目的を達成す
るに至らなかつたのは、國家の爲め誠に遺憾の至りて
あつた。茲に著者が山本内閣組織に至るまでの偽らざ
る經緯を敘し、以て著者が國家的努力の一端を披歷す
るものである、即ち之れを具して賢明なる辱知諸君に
頒ち敢て清鑒に供せんとするものである。

大正十三年四月

著者 識

目次

權兵衛伯との初會見	一
加藤高明を怒らす	六
頭山滿翁と木堂翁	一〇
原敬首相の權兵衛觀	一六
權兵衛遂に門戸開放を宣誓す	二三
山、藤會見迄の東奔西走	二六
山伯の藤子觀	四〇
東郷元帥と權兵衛伯	四五
後藤子の山伯會見感想	四九
懇親會の七日會改稱	五二

加藤高明子と時局を語る	五
權兵衛珍談を語る	六
犬養木堂の督勵と島田沼南	七
熱海に於ける愕堂との會見	七
田中大將に薩長の提携を説く	九
清浦子に時局の難を訴ふ	八
清浦子の意嚮を山伯に傳ふ	九
田中將軍遂に諾す	九
又復た田中大將に迫る	一〇
田中財部兩將會見蹉跌手紙入	一〇
武藤山治氏を大阪に説く	一一
大石翁の豫言と督勵	一九

風雲轉た急なる二週日	一三
富坂の罵倒將軍觀樹翁	一八
松方公の説得を井上元帥に頼む	一六
牧野子と時局を語る	一四
上原元帥と時局を語る	一五
横千の元老論	一五
濱口雄幸氏と論議す	一五

(終り)

政界縱橫錄

(斯くて山本内閣生る)

村上貞一著

權兵衛伯との初會見

——自大正七年秋至大正八年晚春間——

頽廢たいはいせんとした思想界の作興、軍民融和あうわの一大機關として、日刊軍事新聞を創刊せんとした計畫は不幸暫らく中止の已むなきに至つたが、然しこれに代るべき出版宣傳事業は着々として進捗しんぷくし、次第に成果を見るべきものあるに至つたので、一旦挫折くわくかゝつた勇氣も更に愈々百倍した。乃ち大正七年秋九月、これ等の既刊出版物を悉く携も帶して、芝高輪はしかたのの將軍山本權兵衛伯邸を襲うた。維新いしんの功臣として、また世界的偉人

として、強き大宰相として、乃至は日清、日露の兩役に幾多の尊き教訓を體得した名將として、その豊富にして力強き經驗や、意見や、教訓やを聴取し、これを以て最も有力なる宣傳出版を行はんとしたのである。固より何等の紹介狀を持つて居るのでもない。只だ眞向から軍政上の研究者といふ看板を振り翳し、且つ携帶し來れる是等の出版物は、皆悉く署名各氏の談話や筆記を小生の蒐集編著したものである。よろしく高覽に供したる上、面晤の計らひ偏に頼むと申出たのであつた。

今田といふ家令は神妙にこれを伯に取りついだが、然し『如何しても今日は會へぬ。また出直して來てくれ。』とて其の日は空しく歸された。さうしてその後、再三押しかけたが、何時も折悪しく門前拂ひを喰はされたのであつた。然し根氣はなかく、斯の位な事で挫けるものではなかつた。即ち今度は些か手をかへて見やうと思ひ、伯の女婿に當る財部彪氏を芝白金三光町の邸に訪た伯の人物を賞揚して、是非會つて種々政治上の事や、軍事に關した話を聞き取り、これを一つの著述に纏めて國民教育の資に

供したく、幾度か面會を求めたが一度も會へぬとて、其の韓旋役たらんことを請うたら早速の快諾であつた、それで何等かの便りは必らずあるものと期待しつつ、その後暫らく時日も經過したが、待つても、待つても何等の音沙汰もなかつた。

それで、些か焦れつたくもなり出し、催促に出かけやうと思つて居るうち、遂に財部氏は佐世保の鎮守府長官として轉任して了つた。そこで己むなく追跡を思ひ立ち、大正八年春四月、愈々花爛熳の都を後に、佐世保に向つて出發した。

先づ池月旅館に宿所を定めて、早速財部氏を訪ねたら、『多忙のまゝ、遂その機會を失してすまなかつた、早速紹介狀を作つて宿屋までお届けするから何時でも都合を見て逢つて見給へ。』といふのであつた。さうして翌朝わざ／＼副官に持たして伯に對する紹介狀を届けてくれた。

歸京、財部氏の添書を以て、愈々權兵衛伯に逢つた。玄關から二つ目の日本間の應接室に通された、大きな毛皮が敷いてあるのが著しく眼についた。さうして二三分經

つたと思ふ頃、常に寫眞で見馴れて居る權兵衛將軍がのそり／＼とやつて來た。セルの着物に、セルの袴といふスタイル。眼光炯々、滿身皆これ力といふ威風である。初對面の挨拶、來意の簡述を終つて談愈々本論に入る。即ち壯重なる語調を一層壯重にした將軍は、だれきつた國民の思想は明治四十一年、二年の頃から大分變つて來て居る。殊に歐洲の一角から湧き出した世界の大戦後は、各國共にその空氣が一層緊張して來た。自分は曾て獨帝カイゼルに逢つた時、『今や世界の人心は悉く居眠つて居る。これはどうしても一つ大なる警告を發する必要がある。それには先づ世界が一つ騒がなければ駄目である。而も近き將來に於て恐らく其の事あらん。』と言つた事があつたが、それが偶然にも今回の大戦である。さうして思想界、經濟界、すべての科學工業界に大なる刺戟を與へた。わが日本なども實はこれ等の機會に一つ大に乗り出さねば駄目である。日本も偶々世界の五大國に列したとか何とか騒いでゐるが、まだ／＼そこ迄は行つて居ぬ。これは一種の自惚である。漸く小さな日本の一孤島が、僅にその存在だけ

を世界に認められたに過ぎない。これからが本當に彼等の仲間に入すべき奮闘の秋である。』とて堂々外政、内治を談する憂國の氣焔當るべからずであつた。午前九時頃から約四時間に亘る會見であつたが、最後に於て『各方面の空氣は此の際是非とも伯の出馬を希望して居る。』旨を述べたら、それに對しては『いや自分には一般の希望があつても、出る意志も野心も何もない。然し只だ維新の俊傑等が折角築き上げた國策の上に、若しも一旦過なごの生じたやうな場合は、これを批正し、指導してやる位の事は寧ろ進んでやる積りである。』とてキツパリと斷つて居た。

出版宣傳、其他一切の僕の計畫については勿論賛意を表して居た。些か『威意氣』の感もないではなかつた。

加藤高明を怒らす

大正八年の晩秋

『實際自分も、山本伯には是非もう一度捲土重來の機會あらんことを冀ふものであるが、それにつけても此の際是非一度憲政會の總裁加藤高明に逢つて見たがよい。あの男は山本伯には可なり世話にもなつた人で、併もまた双方共に非常に諒解し合つて居るやうでもあつたし、山本伯の前途等に就ても必らず何事が考へて居るに違ひない。』斯う言つて高明加藤に逢ふことを頻りに時の海相加藤友三郎が勧めた。僕自身としてもさう思つて居た矢先でもあり、直に番町の加藤邸を訪ね、自ら所感を述べて『今日我が内政外交の改造を遂行し得る者は、政界何れの方面を見渡しても彼れ權兵衛一人を措いて外にない。』と口火を切つた。これに對して高明氏は曰く、――『自分は今こそ出入せぬが、以前にはよく出入を續けた昵懇者の一人である。實際彼

は海軍の大佐時代から既に大臣宰相としての素質と未來とを有して居た。而して一度大臣になるや、十年間も引き續き其の地位に畫策努めたのみならず、其の辭職後に於て何人が其の椅子に座るも、悉く彼の指導を仰がぬものはない程であつた。即ち薩摩の海軍といふよりは寧ろ權兵衛の海軍の觀があつた。これでは困る。何とかもう少し彼の手を離れた、獨立した神聖な帝國の海軍にしなければならぬと思つて居た折しも、彼の藤井光五郎がシーメンス事件を惹き起したので、これを機會に八代が一切彼の手を切らしめたのであつた。それを今更彼を引き出すといふことは國民の頭に逆行するものたるのみならず、殊に彼には極めて範圍の狭いといふ難點がある。即ち東郷元帥は相當な手柄をした人であるが、井上とか、伊集院だとか、樺山だとか、殆んど生きて居るか死んで居るか判らんやうな連中を引つ張り上げて、今日の如き不經濟な事をやつて居るではないか。』と意氣込んで來る。乃ち僕は

『それでは貴下の範圍は如何か。所論一應ご尤もではあるが、これはたとひ何人がや

るにせよ、その人物の長短をよく知つて居る者を推薦する事は免れない。殊に薩長の如き、陸海軍の先輩たる關係もあり、根據地といふやうな關係もあり、此の方面によく鍛練された人が要するならば、それを擢用することは當然の事ではないか。即ち東郷元帥の如き、彼の日露の大海戦に於て、僅に數時間の中にバルチック艦隊を全滅に歸せしめ、正にネルソン以上の大功を奏した偉人と言つて可い。殊に京都は佛教の地であり、大阪は實業の都である如く、薩長は陸海軍の根據地であり、軍人養生所の名所である。陸海軍の名材を大阪に求め、大商才を京都に求めようとしても異例を除いては不可能である。若しまた貴下が假りに其の任にあつたにしても、矢つ張り下岡とか、濱口とかと、貴下によく知られた人物を引き出すのではないかと推される。それを彼は言ふ事は何よりも貴下の範圍なるものが如何かと思はれる。それよりも自分の聽かんとする處は、現代の宰相として山本伯の手腕の適否如何といふ事と、彼が往年のシーメンス事件に際して果してコンミッション問題の如き事實ありや否やといふ

二件に就いてある。』と疊みかけた。加藤高明言下に答へて曰く――

『それは、左様な事をやる人格の男ではない。それだけは實に氣の毒に思つて居る。』

とて、全然第一問を忘れたかのやう。そのため思ひ出さしてやらうと思つて、

『強く、大なる伯權兵衛は、原や加藤やの如きはまだ、政治家としての乳呑兒だと

言つた。』と話したら、

『彼は横暴だからだッ!』

と毛蟲のやうな眉をビク／＼びくつかせて怒つた。

頭山滿と犬養木堂

— 大正九年の早春 —

大正九年の早春、まだ雪の降つて居る頃の日、日本浪人界の頭目頭山滿翁を、赤坂靈南坂の邸に訪うて時局を談じた。そして、

『此の際どうしても果斷に富んだ、力のある人物が出なければ、時局は益々收拾すべからざるものあるに至るであらう。彼れ原の如き只だ政黨政派の擴張にのみ没頭して、何等爲す事なき者では、内外共に只だ危険を感じるのみである。斯の如きは全く一黨益のために國家が犠牲に供されて居るやうなもので、有害無益、これ程迷惑な事はない。是非とも改造を要すべき秋ではあるが、それには其の經綸に於て、抱負に於て、乃至は實行の力に於て、山本權兵衛伯に如くものはない。』

— と所信を述べ、國家のためには是非ともこれを起用すべく援助を請うた。處が頭山翁

は、『さうく彼れか。あれはなか／＼の緊り者だ。あれの内閣組織當時は、日本の財政々治が悉く行き詰つて、然も歴代内閣が如何ともなし得なかつた程の難局に陥つて居たのであつたが、一度彼が起つや忽ちにしてこれを切り抜けた。此の傾きかけた帝國をドツコイと引き起すやうな大役は、まづあゝいふ男でなければ勤まるまい。俺も彼れには逢つて知つて居る。何時であつたか斯んな事もある。東宮殿下を上野の驛に奉送した時だつたと思ふ。彼れ權兵衛と何か一二語交はした後、君は面が悪るいから人に悪まれるんだとからかつたら、彼はまた俺に對して、貴様はつけ火をしたり、人を殺したりするやうな面ではないぢやないか。と逆襲し、話もあるからチト遊びに來ないか。なご言つた事もあつた。』

『三浦(觀樹將軍)などは、常に彼を以て、維新の桂、寺内、川上(操六)の三人力有する男だと言つて居る程だが、俺もまた彼の巴里會議などに、西園寺見たやうなお人よしの、ヌーボーを遣るよりは、寧ろ彼れ權兵衛でも遣つたら面白かつたらうと思ふ。』

あの面^{おもて}で睨^{にら}みつけたら、顔^{かほ}はされて歸つて來た連中ばかり多い中に、さぞアベコペに彼奴等^{きやつら}を戰慄^{せんりつ}はして歸つて來た事であらう。兎に角もう一度でもよいから出して見たいものである。シーメンスなどはもう帳消しにしてもよい。犬養も大した物にはなれなかつたし、後藤と來た日にアまた子供の橋渡^{はわた}し見たやうなもので危^{あや}くて見ては居られぬし、加藤（高明）も亦た實行力のないフツ／＼男と來て居るし、實際これぞと思はるゝ人物は殆んど拂底^{ふてい}だ。死んだ高島鞆之助は自分の財産を攫^つみ出して競賣^{きやうばい}にまで附して了つたやうな男であつたが、その片割れの權兵衛はまた何處^{どこ}から攫^つみ出して來るか、とにかく淨財を集めて持つて來るやうな奴^{やつ}だけに痛快^{つうかい}である。』

『三浦に逢つて見ると面白い話があると思ふが、俺^{おれ}は一度監獄^{かんごく}から逃^にげ出して來た男を紹介してやつた事があるので、そのため何だか大分迷惑した事があつたさうで、それ以來彼奴^{きやつ}に對する俺の紹介が餘り利かなくなつてゐるのだ。此處^{こゝ}は一つ犬養に逢つて、犬養から紹介して貰つた方が得策だ。』となか／＼親切な、好々爺^{こうこや}振りも見せて居た。

程なく小石川高田豐川町の崖下^{がけした}の邸^{たくら}を訪ねて、當時の國民黨總理犬養木堂に逢つた。さうして自分が『今日迄多數各方面の有力者に會つて見たが、山本伯の蹶起^{けつき}といふ事には悉く賛意を表し、援助をしようと云ふて居る。』とて氏の意嚮^{いかう}を探聞^{たんぶん}し、併せて觀樹將軍三浦梧樓に對する紹介を頼んだ。木堂乃ち曰く、

『彼^{かれ}れはまだ元氣で居るか。暫らく逢うた事がないが、恐らくもう出る氣はあるまいし。又却々^{かゝ}六ツケしい世間にも忘れられて居る若し出て行る勇氣さへあるならば、なか／＼政黨政治などを眼中にあかず、びし／＼と思ふところを敢行^{かんこう}して行く男だけに自分なごも至極賛成である。三浦にも紹介するから逢うてよく話して見るがよい。然も若し彼にして賛意を表するとなれば山縣を動かすにも頗る都合のよい事があるから。』とて即座に紹介狀を認めてくれた。さうして權兵衛を推し立てるに就ては、また段々と君に參考になる話を聞かせるからとて、

『第一あの當時山本を斃^たしたのは、山縣が裏面^{うらめん}に立つてやつた事で、八代（當時の海

相、海軍中將）が彼を豫備に編入する時にも、山縣が自ら午後六時頃の薄暮（くわがた）を利用してわざ／＼八代方に忍び行き、彼れを此のまゝ放置（はうち）しては國民の思想（いふく）が愈々悪化（あくわ）して來るのみならず紛擾する一方である。一日も早く退ける必要がある。と説いたので、八代は翌朝早速宮中に參内、彼れを退くべしと奏請（そうせい）した。今上陛下には一應御考慮（ごこうりょ）あらせられたる上、山縣をお召しになられ、右について御下問（ごげもん）あらせられた。山縣は豫（かね）て自分の巧んだ事でもあり、直にその必要な所以を復命に及び遂に八代の奏請（そうせい）が御裁下（ごさいげ）といふ事になつたのである。これを耳にされた或る宮殿下なども、あれだけの功勞（こうらう）ある者を、一二人間の奏請（そうせい）によつて退けられたといふ事は、餘りに氣の毒（いづゆ）であると憂慮（うれ）あらせられたとさへ承つた程である。これに引きかへ、寺内が元帥になつたが、一體何の勳功（くんこう）があつて然るか。片手落ち（かたておち）も甚しいと思はれる。果して山縣其他の反對派（たいひ）の面々に私的（してき）感情（かんじやう）が伏在（ふくざい）しては居なかつたか。今日人物（じんぶつ）の上から言つてもあれだけの者は數あるまい。これをあのまゝにして置く事は、實際人物經濟上の不利である。」と語

つた。さうして認めてくれた三浦將軍への紹介狀は遂に用ゐることを要せぬやうな好機會に接し（理由提出）今尙はそのまゝに保存してあるがその文面左の如し。

村上貞一氏

右御紹介致候此人は頭山氏の紹介にて始めて面會致候處山本權兵衛論に一種の見解を有し是れに付て御高語を承度とのことに候御接見被下候へば幸甚

犬養毅

觀樹先生侍者

原敬首相の權兵衛觀

——大正十年春四月——

日刊軍事新聞創立計畫當時の委員中の一人たる長岡外史中將の紹介と、矢張同委員であつた貴族院議員加藤恒忠氏の『山本伯を崇拜致し居り候小生の友人村上貞一君を御紹介申上候御差支なき限り是非御引見御腹藏なき御話し願上候』といふ紹介狀とで、芝公園五號地の内閣總理大臣原敬氏邸を訪ねたのは、大正十年の春四月そろ／＼間服などの見え出した頃であつた。折しも來客が三四名あつたとかで、玄關側の狹苦しい應接室にこれこれ一時間半も經つたと思ふころ、『ヤア待たして濟まなかつた』といひながら當の主人公原敬首相がやつて來た。至つて無造作に蚊飛白の着物に矢張り蚊飛白の羽織の襟を立て、着流し一見灸點下しのやうな格好をして椅子に着いた。乃ち僕は——『先づ巴里會議の件につき御意見を伺ひたい旨を述べ、單刀直入』あゝいふ世界

的の大會議に、西園寺公の如き温厚な、お公卿さまなどを遣つて、何一つ意見も、主義主張も押し貫くことなく、只々各國諸豪連の間に晏座してお地藏様のお開帳よろしくを極め込んで來たとは返す／＼も遺憾である。抑もあの會議たるや、是非とも歐洲大戰後に於ける日本の眞威力を徹底的に彼等に示さねばならぬ重大なる文化的の交であつたのである。にも拘らず何等その使命を果すことなくたいその會議を見物して來たと云ふに至つては沙汰の限りである。亞いではまた彼の加藤友三郎の如き、殆んど無準備不用意で華盛頓會議などに列席しこれ亦た向ふの奴等には頭の天ッ邊から十割に六割など、吹きかけられ、悉皆ハーディング等の鼻息に胸膽を抜かされて了ふなど、は何たる事か。然し道がはそのまゝ全部屈服するといふわけにも行けなかつたか、ほんの只申わけばかりに、恐る／＼一割増を申出たといふ事だが、それすら忽ちに拒絶され後見役か、お供役かの徳川公だとか、加藤寛治だとかいふ連中に至つてはまた、恰かも狐や狸ものの如く、銘々勝手放題に各々意見の違つた事を宣傳して、歐米人の

大笑物になつたり数々の失敗だらけである。これ等は全く日本が只よい／＼のお人よしにみられ、甜めに甜め切られた仕打と見るべきのみならず、實に戦争を前提としての國防の力を疑はれたものではないかと思はれる。これでは折角日清日露などの大戦に勝利を得、幾多の辛酸と戦つて今日までに築き上げた帝國海軍の恩人、先輩諸公等に對しても申わけのない始末ではないか。然もこれだけの重大問題を世界的に議するに際し事實上日本海軍の守り本尊たる山本權兵衛などには何等の相談もなかつたなどは非常識も甚しい。』と極論した。

ところが原氏も追がは堪りかねたか。強いて冷靜を装ふものゝ如く、

『それは誰れにいふのか』

と突きかゝつて來たので、僕は言下に、

『加藤に就いて言ふたのであるが責任は貴下にある。』と鸚鵡返へした。然るところ原氏は益々不機嫌らしく、

『山本といふが、最早現役を退いたものに對してわざわざ相談など持ち込む要はないではないか。併も若しあの場合あゝいふ人々に一々相談などかけ廻つてなど居た日には、却つて當人の思ふところが行へず結局の損失になるのである。色々の話もあつた様だが、今日は來客も多數あるので非常に取り込んで居るから。また日を改めて出直して來て貰ひ度い。今日はこれで御免を蒙るがたゞ一言、今の巴里會議などに就ては別に世間の非難も何も聞いて居ない。それを兎や角いふものありとすれば、それは悉く反對黨のやる仕事である。彼等は反對のために反對することを恰かも政治家の本分でもあるかの如く心得て居るのである。また華府會議の話についても、その比率十に六といふのは全く現在の國防に於て日、英、米の力を單位として割り出されたもので、斯くの如き數字の現はれる事は、全く何等の不思議もない、數理的に當然の結果である』と辯明した。そこで僕は、

『然しその場合、山本伯の如き度胸と實力とを兼備した者が行つたら、必ずやアベコ

べに彼等を征服して來たに違ひない。外交といふものは、得てその時の拍子で解決がつくものだと聞いて居る。惜しい事をしたものである。と嘆じた。それに對して原氏は

『いや、今時そんな頑固とか、武斷とかいふやうな事は、今日の外交には通じない、山本の如きも實際君の言ふ如く成る程膽力にも果斷にも富んで居るかは知らんが、とかく相手を向ふに廻しての外交といふものばかり 決して單純に、只だそれだけの事では行くものではない。』とて愈々立ちかけたので、『更に一言』と引きとめ權兵衛出蘆の件を持ち出したら、

『それは、長い將來の間には、或は再び權兵衛さんの出馬を見るやうな事があるかも知れぬが、今日、何もわざわざ強いて彼の人を引つ張り出さなければならぬ必要はない。彼の人でなくとも他に政治家はいくらでも控へて居る。』とて頭から不賛成の意志を表明した。

僕もまた折を見て再び説かんと決心して、其の日はそのまゝに辭し去り、其の後更に兩三回訪ねて見たが、何れも折悪しく逢へず、原氏の權兵衛論も暫らく其のまゝになつて居るうち、不幸終に原氏の兇變事件に遭遇したのであつた。今更ながら、今昔の感に堪へぬものがある。――

權兵衛遂に門戸開放を聲明す

大正十年六月十三日

自分は眞の權兵衛崇拜者四五人を紹介して、是非これ等の者に逢つて貰ひたいと言つたところ、それは今急にでなくともよいであらうとか、もし後廻しにしようとかと、言を左右に託して如何しても諾矣といふ返事をしない。そこで自分は、

『石黒なども斯ういふことを言うて來て居る程です。』

とて六月五日前の石黒よりの書面を示しつゝ、

『然しこの事は必ずしも只だ石黒一人のみの事ではなく、貴下については、今日迄多數各方面の有力者に逢つて居るが、何れも貴下に好感を持ち、尊敬して居る者ばかりであるとして重立ちたる二三の人々の話などを繰り返して聴かした。ところが彼れ權兵衛は、

『どうも今日迄我輩は所謂乾兒といふものを作らなかつた。桂や伊藤などとは違ひ、どうもその方には少しも無頓着であつた。まあその大體の上に於て、君のいふ事と我輩の考とに於て似寄つたところがある。石黒などの如きも多少は物を考へて居る男で、いくらか毒にも藥にもなつた方の男である。乃木などにも懇意にして居た男で、』
 など、石黒子始め二三人物評などをやつた揚句、不圖家の事に關する話などが兎や角と進んで居た。ところがその話中彼伯は、

『君は度々家には來て居るやうだが、まだ自分の家をよく見た事がないだらうな。』

といふので自ら色々と説明しながら、二階や階下の座敷から客間から、湯殿、物置に至るまで悉く見せ廻つた。さうしてそれが令息清君の居間になつて居る二階の一室に行つては、

『これなどは一番見晴しのよい處でね。』

といひながら、若葉の谿谷越しに一眸の下に展開する品川灣を指しつゝ、彼れは舊

幕時代のお臺場だとか、向ふに霞むは房州の山々だとかと得意になつて共に厭かす眺めて再び元の應接室に歸つた。そして話は又もや政治論に復歸したので、折りを窺ひ再び自分は、

『前申した人々には何は兎もあれ是非此の際逢つて置いて頂きたい。』

と繰り返したが、それでも彼は依然として逢はうとは言はなかつた。それで自分も稍斷念めの決心で、

『貴下が海軍大佐時代から既に將來の大臣とか宰相とかと言はれたそれ程、異常な力の持主であつたのである。然しながら如何なる異數の大人物でも、長い間政治社會に遠ざかり、世間から自然に忘れ去られるやうであつてはそれ切りなのである。苟も生命の存する限り國家の前途は見届けねばならぬといふ概のある限り。そのため色々逢ひたいといふ人々には、たとひ時間や面倒はかけるにしても、進んで逢つて話も聞き、指導もしてやるやうでなくては駄目かと思はれる。國民の傾向はどうしても力め

てその國民に接觸するやうでなくては薄らぎ勝ちなものである。これは些か性格を異にする點もあるかも知れぬが、彼の清浦子の如きに於ては、殆んど猫でも杓子にでも努めて逢つて、然も愚にもつかぬやうな事を言つて喜ばして歸すといふので、全く清浦大明神で信仰者が多く、人氣が隆々たるものである。必らずしも此の清浦式にと申すのではないが、今日少くとも貴下の處に面會と要望して來るやうな人々で、貴下の信者でなく、さうして相當の意見を有せぬものはないのである。それを事もなく退けるといふは結局自ら好んで味方を失ひ、却つて反抗的に敵を作る所以であることは、既に内外の歴史にも顯著なる事實である。私は今たとひ貴下の意志感情には全然逆ふとも、國家のために、大多數國民のために、枉げて快くこれ等の者に會見を與へ、否寧ろ喜んで集り來るべき者を迎へ、聞くべきは聞き、誨ふべきは誨へ、正すべきを正してこそ眞に國民を愛し、國家を愛する所以ではないかと痛感する。偉大なる國家の什器であるに似合はず、貴下のあまりにこれ等國民との接觸を好まれぬ勝ちな事につ

いては、牧野でも、財部でも、苟も貴下を思ふて居るものゝ常に憂慮を一にして居る處である。』

と切諫した、處が飽くまでも剛腹なる彼れ權兵衛伯は言下に、

『なに？財部や、牧野やの言ふ事が……』

とて頭から一蹴の見幕である。それで自分も已むなく、

『どうしてもお逢ひ下さらぬといふ事であれば仕方がない。自分等としても只だ、此の國家を思ふの餘り、貴下に對しても色々と御無理を申す次第だが、却つてお氣を悪くする程心が届かぬといふ事であれば、暫らく豫讓の例でも眞似るの外はありませんまい。』

と話して、暇乞ひをしやうと思ひ、その身仕度をし出した。處が權兵衛は曰く、

『うむ、解つた。門戸開放ぢや〜。』

と笑ひながら、

『その代り時間をよく言うて置くが、我輩は朝は五時に起きて散歩をする。それから七時頃に食事をするから、人に逢ふには九時頃が一番都合がよい。午後若し急用その他の止むを得ない場合でもあれば一時頃にして貰ひたい。』

といつて玄關まで送つてくれ、なほも、

『門戸開放ぢやが、あまり色々なものを、矢鱈によこして貰つては困るぞ。』

と石橋を鐵槌で叩いて居た。

山、藤、會見迄の東奔西走

因より關係薄き山本伯後藤子の間は愈々縁なきと聊か感情の行き違ひもあつて双方日を追ふ毎に互に遠距離を畫きつゝあつた然るに余が多年山本伯擁立に付いて果斷決行の權兵衛伯に建設識見の新平子と提携の必要を感じ茲に双方の間に藝妓役を承つたのは數年前の事、會見の機を作つては失敗した事が三回、漸くにして正式の會見は實に大正十一年十一月七日に始つて居るが、その具體的な端緒はその十月廿一日に於ける自分の後藤子訪問に發して居た。即ち同日朝八時半麻布櫻田町の後藤邸を訪へば、其の時既に來客が三名あつたけれども、早速應接室に通され約三十分ばかりで面接した。先づ予は西比利亞の出兵問題を擔ぎ出して、

『十億に近い金と、多數の人命を犠牲にして而も何等得るところなく、華府會議はまた先方の言ふがまゝに六に十などといふ馬鹿氣た比率で服従して來るやうな始末、サガ

レンと來てはまた立派に貸した六億の借金を現ロシア政府に認めしむることが出來ず、そのまゝ認める迄の假占領といふことになつて居るが、果して何時迄手辨當が續くか覺束ない有様、内には聲明して居る各省豫算の、二割五分の天引どころか湯錢の値下すらも實行出來ぬ、内外共愈々ドン底に行詰つて、最早日本の經營は不可能となることを憂へる、然も加藤首相は無病でさへ頼むに足らぬ無能に加へて病弱で議會の開院式にすら出られず、自分の一身上の自由さへも利かぬやうな有様では、到底今日の難局を收拾することは彼れには望まれぬ。去りとて之れに取つて代るべき者はと見渡したところで、これ又何れも五十歩百歩の代物ばかり、

貴下と山本權兵衛とを措いては他に日本の領土には居らぬ、田健、齋藤實、高橋是清等の如き未製品で了つた連中等は、申すに及ばず私が今日迄色々數年の間各方面の有力者に逢ひ、それ等の意見も徴した上での話であるが、これは如何にしても一つ貴下と伯との協力で此際帝國を改造するの必要があります、而してそれには屢々貴

下にもお話もしたことと思ふが、貴下一人だけでは不可能である。即ち貴下には西園寺、松方等の信用も厚からず、西園寺の前秘書であつて未だに西園寺公に接近して居る某氏を通して、公の意中を聞いて見ても明瞭なる事實である。即ち元老側の信用上より、また政黨を有せぬ關係より見ても、如何に地團ん駄踏んでも可能性は少しもない。どうしても此の際權兵衛とお組になることが必要である。貴下が權兵衛と御組みになつたら、それこそ天下無敵であります、兎に角是非此の際一度山本伯と會見して、双方の諒解を得て置くことが必要であります。と述べて伯に會見を極力勸告した。子の動きそうな様子が見えたので自分は隠さず

『それは貴下も又權兵衛もよく知つて居る實業界の某有力者で、若し貴下を何處かへ御招待をするといふやうなことであつたら、萬障御繰り合せ其處へお出でが願はれたい。それには山本伯も來合すかも知れぬが』

と計畫の一端を話せば子爵は『行つてもよい』との承諾であつた

失敗の第一案

此の日は後藤子に晝食の馳走になり午後一時半辭退して歸途豫ての手筈により既に山本伯に會見しその誘導役を勤めた筈の前記某有力者を訪ね伯の意嚮を聞いたら曰く『結局今そいふ事をしては都合が悪い。世間が色々と誤解をして騒ぐ、自分も後藤も双方共によくない。』と斷つたから無理に云はなかつた、君が一つ話して見て呉れと云ふのであり後藤は既に承諾して居る以上權兵衛さんも是非共引出さねばならぬ必要を感じ翌日早朝山本伯邸を訪ふた而して種々話の丁に自分は伯に向つて後藤は貴下に對し常に好感を以つて居ります、然し自分の懇意の者が貴下を招待するそれで後藤子も出席するので別に深い意味はありません只色々と御意見を伺ひ且つ將來御指導を仰ぎたいとの事でそれに請譜の出來たお祝も兼ねてお招きするそうですと話すに伯曰く『イヤ昨日某が遣つて來た我輩又君の遣る事と思つて居た』アノ男は支那で逢つて知つて居る人格の中々良い男だイヤ案内は結構だが此の際そんなことを遣つては良くない

昨日も其事を話して置いたと頑張る然し折角の企て自分の面目も立たぬので更に財部氏を某案内者邸へ招いて三方から口説いたが遂に第一案は見事に失敗に歸して了つた

蹉跌の第二案

山本伯が逗子の別荘に行くことから思ひづき、其處ならば餘り人目にも立たず静かでもあり、落ちていて悠然り話も出来るであろう。即ち場所を逗子といふことにして偕て山本伯の向ふへ出かける時機は何時頃であらうか。これは一つ財部氏が主役として至急探つて貰はねばならぬといふことになつた。處が財部氏は『伯は毎月末には大抵彼方へ行かれるやうだから、そのころを狙へば大概間違ひはない。』といふので時機も本月末といふ事に大體の見當をつけて運動に着手することになつたのであつた。尙ほ財部邸で某氏と三名夜の十二時頃迄協議したが結局自分が十月廿二日となつた前夜の協議の結果山伯の交渉を承つた兩者の引つ張り出し役として午前六時に朝食を済し、山本伯邸に向つたが如何しても今日は逢へぬといふことで一旦歸宅の上、早稻田

に長谷川元帥を訪問し、午後後藤邸を訪ひ。そして月末の逗子別荘に於ける會見の都合を聞いたら、『逗子に行くことは構はぬが、今月末には先約がある』とてプログラムを調べ『來月の二日なら、約束はあるのだが何とか繰り合せがつかぬことゝない。』といふ返答であつた。そこで翌廿三日朝六時半頃、權兵衛伯に逢ふべく、電話で都合を聞いたら、『今すぐ來い。』との事で早速出かけた。例の家扶今田君が玄關に出て來て、自分の顔を見るやいきなり。

『あゝ一寸おまち下さい。』とて上草履を出した。應接間に通つて間もなく、權兵衛伯が見えた。

『やアご機嫌か。昨日は失禮した。』

とて先づ話は武器問題に入り、『一體原少佐一人に責を負はせて、長官當局は少しも關せず焉で居るとは全く日本の軍規を破壊するものである。』とて老伯の氣焰漸く上り出したが、愈々本論の山、藤、會見問題に移り『今月末逗子別荘の方へお出かけの由に付

き、後藤子にその話をして都合を聞いたら、來月の二日になら都合して行けるといふ返答である。もしお出になる事でしたら少し日を延して二日に都合をつけて頂けたら非常に好都合である。』と申出るや伯は

『自分は先日友人の伊瀬地陸軍中將が死去した時に彼方^{あちら}に行つて、序に逗子の用事は萬事済して來てあるので、當方二三ヶ月間は行く必要がなくなつて居る。折角^{せうかく}だが其通りであるから後藤に傳へて呉れとブツ切ら捧の返事で然し自分の内なら逢ふに都合が良いと云ふ意志は見へたが先づ第二案たる逗子會見の計畫も遂に全然破れてしまつた。

纏つた第三案

翌廿四日が來た氣持のよい小春日であつた。再三迄も失敗話を持參^{もくさん}して子爵の許^{もと}へ辯明に行かねばならぬので何となく濟まない氣がしだして進まぬ勝ちの體に勇^{ゆう}を鼓^こして朝八時に後藤子邸を訪れた。岸清一博士を始め二三人の來客があつた、早速會見昨日山

本伯に逢つた經過を話し逗子には今暫く行かぬ事になつて居る事情を述べて逗子に於ての會見の計畫は中止し更に後藤子に『山本伯はあなたの先輩でもあるしあなたが伯の家に御出下されると云ふことは萬一世間に洩れたとしても差支なきことと思ひますから伯の邸に御出を願ひ度いと思ひますが然し再三の行違ひですから今度は伯が貴下の方へ見へる様子でありますと云ふと子はイヤ自邸では都合が悪い自分が行くといはれたから然らば御出を願ひ度いと茲に隙^{すき}さず子爵を慫慂^{しやうよう}した。『それでは都合して來月の七日の午前十時に伯邸に行く事にしやうと云ふ』子爵の承諾を得た。甘く遣つたと思ひながら逃げる様にして午前十時半後藤邸を辭し途中晝食を濟まして午後一時高輪の權兵衛邸を訪ふた。

所が自動車が玄關先に廻され伯は洋服姿で將に裏口から洋杖^{やうつぎ}を持ち乍ら出掛けんとした矢先であつたが「一寸なら」とてそのまゝ引き返し應接室に入る、早速に加藤首相の病氣^{びやうき}の話に始まり續いて今日の午前中に於ける後藤子との會見談を持ち出して伯に

好感を持つて居る事やら子爵の長所やら並べ立て先づあの頑固頭がんこくうに電氣を送つた上『十一月七日の午前拾時に後藤子ごとうこが此處こゝに來ると云ふことだから、是非大いに歡迎を願ひ度い。』と云ふたら、伯は『兎に角それでは逢ふことにするからさういふてくれ。但しそれには當日の一日前位に豫め電話をかけて置いて來て貰ひたい。我輩わがはいの姉も病氣で毎日見舞に行つて居る始末しまつでもありそれに逢ふ時日が長いから如何なる突發的とつぱんの事が出来るかも知れんから』と結び、且つ曰く、

『何を云ふても後藤も一個の珍物だ。屢々しばしば危險きけんも有つたが留め直す力もある、これから大に政界に乗り出さなくては駄目だ。』桂も彼は使へる男だと云つて居た』と語を續けて『人間が世に處するには種々の難物がある後藤も處世に長じた點がある云々』と少し以前迄の反感は何時いつか去つて茲に愈々いづつの會見の機を作る迄に到つた其間藝妓となり謀介者となつて話はこれで九分九厘迄の決定ではあるが、只だ一つ『前日に電話をかける』件だけはまだ全然後藤子には通じて居ぬので、權兵衛邸を出たその足で直ぐ

後藤子を丸の内の東京市役所に訪問し、市長室に於て、前記山本伯に會見の結果、七日の會見は承諾、前日に電話をかける事の二件につき話したら、後藤子は『よし承知した。』とて茲に山藤會見の手筈てはづは漸くにして愈々いづつ纏つた。

斯くて十一月に入つたが間もなく僕は腸を病み、是非とも靜養を要するといふ醫者の注意で山藤兩氏の會見三四日前に、上州磯部温泉に轉地した。さうして約二週間ばかりの豫定で滞在しようとしたのだが、日一日と迫つて來る會見日が氣になつて來て如何しても居たゝまらず、とうとうその前日に歸京してしまつた。

會見の當日

そして愈々當日たる七日の早朝麻布の後藤邸に行つて見たら、珍らしい程の御機嫌ごきげんで『きのふ電話をかけたよ。そしたら今日の九時頃にといふ事なので、もうそろゝゆかうと思つて居たところだ。』と言つて居た。もうこれで安心だ。と思ひ乍らその足ですぐ麻布富士見町の山之内一次氏方に廻り、右の顛末てんまつを知らした。

さうして色々政治談に花を咲かせ居るうち、山之内氏は氣を利かして、後藤子邸へ電話をかけさせて見たら、その返事は、

『お留守でございます。今から約三十分許り前に御出かけになりました。』

と云ふことであつた。行先の何處かと云ふやうなことはもう聞く必要がない。自分も山之内と共に『愈々大丈夫だ。』と言ひ合つて安心した。引續き十時半頃迄、種々權兵衛を引き出す事について將來を談じ、尙ほそれにつき明日岡野司法大臣を訪問すべき事を申合せて歸宅した

山藤伯子はけふ確かに會見した。然しその模様については、その後夜に入つても未だ何等の消息にも接しなかつたので、麻布の山之内氏へ電話をかけて見た。そうして『その後伯に逢つて會見の模様が、感想かを聞いては見なかつたか。』と云つたら、山之内氏の返事には、

『イヤまだ聞かぬ。けれどもあれから君と別れて、俾で權兵衛邸前を一二回往復して様

子を見た。處が確かに後藤子の自動車と見られるもの一臺が午後十二時半頃まで待つて居たから、結局午前九時から午後十二時半に至る前後四時半に亘る長時間の會見であり、相當隔意なき意見の交換も行はれ、諒解も得られたことと思はれる。』と云ふことであつた。

會見の暗示

山藤兩氏の會見も、以前に於ては或は在つたかも知れぬ。然しながら常に互に諒解を有つてのそれではなかつた事は殆んど周知の事實であつたかも知れぬ。それが兎にも角にも今回の如く幾度か蹉跌や失敗の末とは言へ而してまた假令たゞ漠然たる會見であつたにもせよ。その行き詰つて居た時局に鑑み、決して單なる、無意義に終るべき會見として見流すわけには行かなかつた。さうして衷心國家のために其の多年の宿望が近づく事を祝福しつゝ此の日の日記を擲筆した。

山伯の藤子観

大正十一年十一月十四日

幾度か失敗に失敗を重ねた結果、漸くにして山藤の會見を見るに至つたのみならず十一日には更に前大藏大臣勝田主計氏の山伯訪問さへ成功した。此の間に於ける山伯の感想は如何なものか。これを聞き取るべく十一月十四日午前八時芝高輪の邸に權兵衛伯を訪れた。

玄關先に立つたら今迄見たことのない女中が取次ぎに出た。自分は『村上です。』と言うたら

『ア左様でございますか。』と言ひ捨て、奥にかけ込んで行つた。その時玄關先には一臺の自動車が待つて居たので、偕てはもう來客かと思つて居た處、女中が再び出て來て、『實は只今御出かけになる處で、自動車もあの通りまたして有るやうな次第ですが

どうぞお上り下さいといふ事でございます。』と云ふので案内さるゝまゝに例の奥の日本式應接室にと通つた。床の間には乃木大將揮毫の一幅が掛けられてあつた。熟々見入つて居る中に『ヤア』といふ元氣のよい聲がして山伯がやつて來た。

さうして『これはね』とまづその乃木將軍の掛軸を指しつゝ、それが自分の手に入つた次第を語り出した。曰く『これは乃木があゝの殉死の事ある前日に、わざ／＼自分のところへ届けてくれた彼の絶筆である。』とて其の詩句を一二句低唱して感慨に堪へぬものゝ如く、『彼の至誠至忠はよくこれ等の詩句に溢れて居るが、然し事前に既にあれ程の覺悟を決してゐたのであつたといふことは後で判つた。

實際桂と乃木とは性格の相違といふ點もあつたらうが、もと／＼多少の意見を異にして居たのみならず常に双方とも融和を缺いて居たやうでもあつた。然し桂とは我輩と雖も政治上に關しては多少意見を異にした點もないではなかつたが、此の乃木とは常に意見の軒格も見ず殊に彼れの正直にして一意只だ、忠君愛國を念とした點に於て

相好かつたやうである。』など、語つてなか／＼愛嬌顔を見せて居た。さうして思ひつきの如く、

『此の間はまた、君が屢々氣を揉んだ彼の後藤と、それから少し後れて勝田と二人がやつて來たよ。そうして双方とも可なりの長時間に亘つて話をした。後藤とは暫く振りの會見でもあつたが、あれでなか／＼落ちつきも出來たやうであり、色々とまた各方面に對する研究も、經驗も出來て來たやうに見えた。』

凡ての物事に對する理解力も有つて居るやうだし、また相當の見識も有り、自分の主義政策を實行して行かうとする意志も、努力もなか／＼出來て來て居るやうであつた。

國家的觀念に於ても以前とは餘程の逕庭があるやうであり、概して彼の故兒玉に似て來て居るやうである。』など、恰も女房選みの見合を濟まして、口には言はねどそれとなく氣に入つた素振を見せる時のやうな様子、

『それで後藤子にも——國事の爲に益々大に努力せなければ不可ぬと言ふたら、彼れ亦た鸚鵡返しに、——貴下こそ是非一つ大に國家のため努力を願ひ度いなど、言ふて居た。』

とて、さも／＼心地よげであつた。且つ曰く、『勝田か、彼れもまたなか／＼經濟的に大局を研究しつある様子。先づ確かに財政界の一つの器と見えた。』とて喜んで居たが、此の時不圖氣かついたらしく、

『時に、それは自分が見たわけではないが、昨日山之内（一次氏現鐵相）がやつて來ての話を、何かの新聞に自分に關した記事が出て居るそうだが……』と言ひ出したので僕は、

『それはまた何ういふ記事ですか。』

と問ふたら、伯は

「何でも我輩が毎朝運動を日課のやうにして居るが、それもわざ／＼近所の池田侯爵

邸内に何等の斷りも許しも受けずに闖入して、勝手に散歩廻つて居るのを、同家の番人に捕へられて云々と言つたやうな馬鹿氣な事だそうだ。然し我輩としては少しもそんな事を知らず、またまだ曾て池田侯邸に行つて見たこともなければ、それが何處に有るのかさへ知らぬ程である。それをさもなく事實らしく新聞紙上に書き出すなどゝは以ての外であるのみならず、書かれた我輩よりも寧ろ池田侯の方が迷惑しはせぬかと思ふ。」

と云ふことであつた。さうして兎にも角にも取り消しをされた方がよろうといふ事になり、僕がまた其の斡旋役を引受けたのであるが、それが一體何新聞であるか皆目判らぬので、それを知るべく伯邸を辭して、麻布富士見町の山之内一次氏邸に立ち寄り、國民新聞紙上であつた事が判つたので、その日の午後迄に、日吉町の同新聞社に理事の守武幾太郎氏を訪ねて右取消しを依頼した。

翌日の朝刊に其の取消が掲出されたので、それを一應伯邸に郵送して置いた。

東郷元帥と權兵衛伯

大正十一年十一月廿日

風吹き寒い、雪のちら／＼する朝であつた。

相變らず權兵衛を擔いで八時頃先づ中橋徳五郎氏を訪ねたが、不在であつたので直ぐ東郷平八郎元帥邸を訪ふた。十年來も御伺して居るが何時も心能く御接見を願つてゐる、都度勿體ないと思つて居る玄關の應接には幾年となく廣瀬中佐の土造の模型が硝子箱の中に納めてあるのが目と精神を刺戟させる奥の應接は園田男の日清戦争當時に作つた詩の石版刷りが何時も床にブラ下げてあるのが目につく此日も例の如く快よく奥の應接に通されると、間もなく元帥が袴羽織の姿でニコ／＼しながら顯はれ

『いやー暫らく、何も故障はありません』

かといふ御機嫌斜ならずである。自分は一寸腸を悪くして上州磯部の温泉に参り

二三日それに浴して見たが、少しは効能もあるやうだといふやうな挨拶を述べた上

『時に近來外交の失敗が餘に重ね／＼のため、日本もなか／＼危険の狀態から脱することが困難である。對支問題なども愈々以て難かしくなる一方で、彼の如きは全く英、米等を有力なる背景として、滿洲や臺灣を日本から奪はんとする形勢さへ見え來つて居る。即ち對支政策の誤りから出發したる、顯著なる失敗の一例を見倣すべきではなからうかと云ふ様な外交問題を話すと元帥は曰く外交も色々變るので支那は却て面倒なる國で一寸解決は付き難いのです少し納つたかとするると又騒ぐので文の力は相當に明かつ居るのですが武で自國を傷めるので、稍もすると英米に利を占められるでせう、一方歐洲各國の形勢も亦たなか／＼刻々の變り方で、英國の如きも保守黨が勝を制して、勞働黨が勢力を持上げたと言つた調子で、土耳其の如き、亦たなか／＼の勢ひでコンスタンチノールを占領し、次第に東亞細亞に手を伸しつゝあり、獨逸の國力回復亦た日本の五十年もかゝるべきところを、僅かに二十五年もかゝれば、優

に回復して見せると言つた風の素破らしい勢で、着々復舊の實を擧げつゝあやうな始末で斯る場合、これに介在する日本の内外の實情は果して如何か却て面倒なものですと云はれるに對し自分は殊に日本の特徴であり、名物とまで言はれて居る固有の軍事思想が次第薄らぎ、直譯的な歐米の危険思想が滔々として流れ込むで居るやうな今日、彼の山本權兵衛の如き明治維新來の國難に國家的に鍛練した、非凡の猛者でも出て來なければ到底治まりがつかぬと信ずる。

『然らざれば貴下等が折角日清、日露等の大役を経て苦心慘憺築き上げられたる此の日本を終に失はしてしまふ虞れがあると思はれるのです』又元帥曰く然し英佛米の如き混雜した國とは違つて容易に五十年そこらで此の國民性が動くものではありませんまい、日本の國民性は却々能く鍛へて居ります、彼是と云ふてもイザ外國の刺激でも受けるとグツと舉國一致する精神は何と曰ふても世界の名産である又山本ですか。『彼は早くから身は軍籍ですが武人としてよりは寧ろ始終政治に興味を持つて研究を續けた

ものであつたが、マア彼は明治大帝の御聖旨を奉じ押し貫いて來た男です。國難の經驗などにも屢々遭遇して來て居るが、どうも世の中といふものは色々とまた難かしいものです……『古い事です、閣下西郷があゝの當時朝鮮を取つて居たなら今の朝鮮が北海道位の程度に發育が出来て居たでせう、元帥曰く『然し臺灣を取つて居なかつたら朝鮮經營も中々六ツカしいでしよ云々』暫らく默考に沈んで居たが

私は政治の事は知りませんが、

『まあ、あの犬養などが一つ何か考へて居るでしよ』と語り、二三外人の人物評なども聞かされてお暇した。

後藤子の山伯會見感想

——大正十一年十一月廿四日——

山伯邸に行つて見ようと思つたのであつたが、それよりも彼の會見後まだ後藤子に逢ふの機會を有しなかつた。一つ子に伯に會つた時の感想を聽いて置かねばならぬと思つて、朝八時頃麻布の後藤邸を訪れた。

既に學生らしいものが五名ばかり來て居つたが、奥の應接間で早速子に會見、まづ對支問題から英米等各國に對する外交問題に及び、轉じて内政の無能振りを難じ、苟も心あるものは最早到底傍觀し居るべき秋でない事を痛説した。鼻眼鏡を弄りつゝあつた子は、又かと言はんばかりの哄笑政策を頻りに弄しつゝ、それには一つの直接の答辯もせず、全然話頭を一轉して曰く、

『先日あれから權兵衛に逢うたよ。可なり長時間に亘つて色々話しが出たが、彼れ

も中々元氣旺盛なもので、あの意氣ではまだ大に遣れるよ。西園寺といふが、西園寺などよりは遙に實行力に於ては偉いよ。何しろ相も變らず押しが強い。此の際はいふのを出したら必らず何事か遣り出すに違ひないが、然し今日まだどうも世間の空氣が厚くないので如何かと思つて居る。當人自身にしたところが、斷じて隱退を固守するといふ意志でもないらしく觀取されたが、君はその後伯には逢つて見たか？』

といふのであつた。僕は

『え、數日前に逢ひました。ところが權兵衛は、貴下の事を年を老つたせいか以前逢つて居た時分とは非常に違つた人物になつて居る。國家に對する心配振りも只だ口先きばかりではないやうになつて居るし。物事に對する理解力も出來て來てるし、前には無闇に人物の事なんかでわい／＼言うて居た位であつたが、それも落ち着いて來て居るし、社會國家の萬般に亘つて經驗も積み、可なりの抱負も持つて來たやうに見えた、まア一言にしていへば推賞して居りました。と答へたら後藤子も亦た、

『イヤ實際山本伯はまだなか／＼元氣がある。世界の大勢、時局に就てもまた相當に考へても居り、經倫抱負に於ても實に偉どすべきものを藏して居るやうだ。場合によつては是非一度引出して見ても可からう。』

とて、それ等について互に一問一答を交はし居る際、不圖子爵との間に一種の名案が出て來たので種々協議の結果愈々着手する事にして引き去つた但し本問題は極秘の必要あり絶対に發表してはならぬ事だ、既に着手以來十二月上旬より三月下旬に渡り此間元老大官に往復すること實に數回に及んだのであつた。

懇親會の七日會改名

——大正十一年十一月廿八日——

愈々懇親會の當日である。豫て案内狀を發した事、會の組織目的やら創立の趣旨やら、乃至會員の顔觸^{いざなれ}やらは既記。七日會の前身と岡野法相(大正十一年十一月十九日)の項に示してある通りで茲には省略するが、豫定の如く午後六時から赤坂の『錦水』に於て開會した。

主催者といふ關係上、自分は定刻の約一時間ばかり前に會場 先着、何かにと準備中、午後五時半頃から三菱の三宅川百太郎を先頭に、松木幹一郎(現復興院副總裁)、樺山資英(現内閣書記官長)西原龜三、三井の牧田環等の順で續々と十餘名參集したが定刻三十分過ぎになつても、來なければならぬ筈の勝田主計が見えぬので、頻りに自宅へ電話をかけてゐると、松木がやつて來て『おい村上君、勝田君が來たよ。今來た

よ。』といふて知らせたので、早速配膳を命じ夫々着席の上宴始まるや、何れも互に打ち解けた連中の事とて、或は幽靈だの、狐や神が人間に乗り移つたのなど、他愛もない話か盛んに彈み出して、頻りに怖がる女中連を脅かしつゝ盃を重ねた。さうして一番メートルを上げたのは三宅川で、次點者は勝田であつた。

食事を終つた上、先づ勝田、西原の兩氏に、寺内内閣當時に於て喧じかつた借款問題を説明させることに全會の意見が一致し、第一に勝田氏が諒々と委細の説明をなし次に西原氏が詳細に亘つて真相を發表した。それから會名を單に『懇親會』と稱して來たが、自今『七日會』と改稱するの件を松木と協議して會員の賛成を得る筈にした。

七日會といふ名稱の緣起は、懇親會が豫て生れた因縁で山伯藤子の意義ある會見が、去る『七日』に行はれたといふので、これを記念する旁々永く會名に冠して一層の努力を傾注しようといふ主旨から出發したものであつた。

それから各種の雜談に入り、支那問題等に花を咲かせて午後十二時近くに散會した

が、其の後は矢張り『申合せ』に所謂各種の必要上殆んど毎隔月七の日を期して開會を續ける都合であつた一番最近では丁度六月廿七日に、芝の紅葉館に於て開會した。

その時には矢張り大體前記のやうな顔觸れに、現海相財部大將、伊東日本郵船社長、伊藤文吉男、現内務大臣後藤新平子等十數餘名の出席でなか／＼の盛會、後藤新平子は此の日特に日露問題に關し、ヨッフエ氏を招待したる理由から、將來益々日露兩國關係の複雑し來るべき事情、並にこれが解決の必要急務なる所以を詳細に説明するところあり、更に銘々の時局に對する感想等に時の移るを忘れ、午後十二時半頃に漸く散會した程であつた。

それから翌七月を除き八月に例會がある筈のところ暑中といふ事で翌九月に延期となつて居たところ、恰かも彼の大震災と、政變に伴ふ政界多事の爲めに、自然の延期になつて居る。

加藤高明子と時局を語る

——大正十一年十二月一日——

午前八時頃、芝巴町の横田千之助氏を訪問したところ、早朝より外出したとの事で直に加藤高明子を訪ふべく、途中巴町の酒屋で電話をかけて都合を聞いた。九時半頃迄に來てくれ、待つて居るから』とのことで、折柄通り合した市街自動車に飛び乗り麴町九丁目で降りて徒歩加藤邸のかた苦しい玄關に入つた。書生が出て來て『あなた村上さんですか。どうぞこちらへ、』とて奥の應接に案内された。間もなく本尊の加藤子が紋付羽織袴でノソリ／＼とやつて來た。

自分は山本伯の事について度々お伺ひしたが、けふは少しく政局に關して御意見をうかがひたき旨を述べ、更に自分は外交問題などに對しては極めて素人であるが、然し素人の話も幾許かの御參考にはなるかも知れぬと切り出して、先づ歐洲の外交問題

から現内閣の無政策、經濟政策の無能振りに及び、一日一刻も早く國家國民のために加藤内閣の倒壊を切望する旨を論じた。これに對して子は、

『大略今のお話の通りである。現内閣も最近何か一つ發表めいたものをやつたやうだが、經濟政策等の問題等に對しても、現在湯錢の値下げすら實行が出来て居ぬやうな無能振りである。一體加藤友三郎なる者は、只だ一箇の海軍の技術者に過ぎず、その技術の事に關しては多少心得ても居るだらうが、政治向きの事などに至つては更に解る男ではない。勿論外交どころか、内政も、國情さへも恐らくよくは解つては居まいそれを只だ一寸華盛頓會議に顔を出したからといふので、政友會あたりが其の黨利の關係から彼を出したやうなものである。華府會議の如きも、その初めから何だか判らぬやうな事をやつて來たのであるが、これ等につけても國民に、近頃一體に熱がなさ過ぎるやうである。』とて例の毛蟲眉をビクつかせ、

『先日一寸加藤にも出つ會したが、その顔色などは、まるで四五日前に病氣でもしたか

のやう、それでは熱もなければ智慧や考の出るべき筈もない。これ等に比べるとまたあの原の方が、多數黨を有し、元氣もあつたらしかつたやうに幾許か政治家らしい風もあつたが、然しこれとて土方の親方風な男で、終始政黨の事ばかりに没頭して居り黨の多數になつたといふのも、つまりは滿鐵や阿片の問題に關して人間の頭數を集めたもので、遂にあのやうな始末に終つたのは、まことに彼のために氣の毒ではあつたが、また已むを得ぬことであつたらう。だが此の原から見れば、今の加藤にせよ、前の高橋にせよ、まるで子供のやうなもので話をするのも馬鹿らしく、滑稽で相手にされぬ程である。』と切る。そこで自分は、

『貴下の憲政會も、もう長い間苦心懺悔戰つて來たやうであるが、今日の如き情況ではもう駄目だと思ふ。何か一つ此の際、若しこれで行けなければ彼れで遣るといふ風な、新しい一策を考へて、猛然躍進しなければ自滅の外はないと思ふ。民心ももう大分厭が來てる様子、政友會亦た政策のために大失敗を重ね、これまた民心を離れて

亡びかけて居るが、憲政會に自ら衰弱して息を引き取りかけて居るやうなものである。然し、どちらかと言へば、政友會は政策の失敗の爲だから、これは政策を改めて行けば、所謂多數黨の力で今暫くは如何やら斯うやら押して行けぬ事もないかも知れぬが、憲政會の自然の衰弱といふのでは如何にも始末におへない。餘程思ひ切つた若返り法でも講せぬ限りは愈々衰亡の外はない。然もなければ貴下は暫らく黨首を御休憩にでもなる外はない。然らば貴下にはまだ國民の信望が繋がるべく、黨と共に自滅しては復た再び起つ能はざるやうな破目に陥るかも知れぬ。これ迄に努力して遂に失つてしまふといふことは實に惜しいと思はれる。一つ此の際如何です、山本伯に逢つて諒解して置かれては。彼れはまだ／＼暫らくは勢力を持ち續けることと思はれる。何を言つても明治の維新は土肥と協力した薩長の力に據るもので、今日の日本の築き上げられたる亦た大に與るところがあるべきである。然しそれとて今日では山縣公が逝き、殘物は只だ權兵衛一人となつて居る。然もまた此の殘物たるや、維新の殘物中でも特に勳

ある大殘物で、これの動く間はまだ／＼これを無視して徳はない。これを貴下が活かして、利用することが即ち貴下の爲であり、黨利であり、國家の利益である。前言に所謂若返りの途も茲に在る。行き詰つて居る道に立往生して居るより新道を切り開いて行くべきで在る。さもないければ幾許地駄んだ踏んで見たところで何にもならぬ。私は西園寺公にも懇意であるが、彼れとて決して貴下を信用しては居らぬ。貴下が權兵衛を利用することになれば各方面共に回復の見込は充分にある。權兵衛伯にしてもまた貴下には好意を有して居るのだから……』と語るや、高明子も餘程以前の如き強情が柔らぎ來つたものゝ如く、尤も何時ぞやの際のは、わざ／＼自分が擲擲て怒らしたのではあつたが、——曰く、

『彼れは先輩でもあり、押しも利く人物である。此の頃ではまたなか／＼身體も達者で元氣だといふ話、自分も行つて話すのは差支ないが、何しろ世間がわい／＼五月蠅くて困る。』とてまた眉を一びくり、

そこで自分は、『イヤ決してその御心配は無用。少しも知れぬやうに幾許でも取計らはれる。』旨を述べ、それから話は英國の政治家談に飛び移つた。

時に午前十一時半、折柄憲政會の代議士望月小太郎氏が來合せたので、英國の政談は愈々花が咲き出した。が途中で失敬した

權兵衛珍談を語る

——大正十一年十二月八日——

朝六時、電話で打合せの上、權兵衛伯を訪ふ。直ぐ奥の應接に通つて椅子に腰をおろすや否や、待つて居たと言はぬばかりに、

『やア、寒いぢやないか。が、もうこれが本當だらう。』などといふ御機嫌で權兵衛老がやつて來た。

さうして熱海の温泉の話や、別府の温泉などの話が出たが、その何とかいふ別府の旅館に泊つたら、近所で頻りに三味線の音がしたので閉口した、話をなし、『どうも我輩あのビン／＼言はすのが大嫌ひで困るテ。』

とて苦笑して居た。

それから自分は、其の後岡野法相に逢ふたら、貴下の處へ最近兩三度見えたとか言

つて居たがと話したら、『うむ、來た。』と答へて居た。亞いで加藤友三郎の無能な事、内閣の愈々不統一を極めて居る事等を語り、また加藤高明や、横田千之助に逢ひ、色々話し合つた次第や、それ等の感想などを詳しく話した。權兵衛伯は曰く、

『君は加藤高明をよく知つて居るか。彼れは以前我輩の處へはよく來たものだ。彼れもなか／＼使へぬ男ではないよ。』

とて、各種の人物評に移り、果は維新後の伊藤、木戸、大久保、西郷等諸卿と伯自身の政治上の關係、意見の相違點等から、明治三十三年の團匪事件に關して主戰か否戰かの大問題につき西郷公と大激論をした顛末等に及び、比較的伊藤公とは意見の合つた點もあつたといふので次のやうな話などもした。

『自分の海軍大佐頃で、海軍大臣になつた頃であつたと思ふ。その頃迄の日本の軍政は所謂三角制度で、參謀本部の下に陸軍省と海軍省とが置かれてあつたのである。陸軍が參謀本部の下に在ることに異論ないが、海軍省の仕事までも參謀本部で兼ねるこ

とは以ての外の誤りである。四面海を繞らして居る島國の此の日本が、一朝他國と事を交へた場合に、先づ第一に活動すべきものは海軍である。それを參謀本部で片手間扱にして居るが如きは不都合も甚しい。是非とも國防の大局に鑑み、別に、特に海軍のために獨立した參謀部を新設するの必要があるといふので、陸軍省の參謀本部に於けるが如く、海軍省の軍令部なるものを對設し、所謂四角制にしてその充實を謀らねばならぬといふ持論を持ち出し、深更に亘つて伊藤公(當時の總理)と論戰した事があつたが、結局伊藤公も、——實は俺もさうは思つて居た、とて同意し、爾來今日のやうな制度で續いて來たのである。』と語り、それからそれへと話は續いたが、その間には、

『まことに畏れ多い話だが、』

と前提して、明治天皇の御敬徳に關する謹語などもあつた。即ち、

『明治大帝は御洋服はよく好んで召しになられた御様子だが、何しろズボン釣りを

お召しにならなかつた結果、自然にズボンが下つて来て、何時もお裾を縮めて引きづるやうにして居られた。これは陛下御自らも嘸御不自由に思召さるゝ事であらうし、また尠なからず御氣持にも關する事でもあり、何とか御進言の上、ズボン釣をお薦めしたいものと思つて居た際、丁度恰かも樺山(資紀)が佛蘭西でズボンを引き摺つて外交團に笑はれた話を耳にしたので、その消息を申上げながら、最近手に入つた外國製のズボン釣り二本を献上したところ、大帝には早速御嘉納あらせられたのみならず、『大變に具合がよい。』とまで仰せられて、『何時も離さず御愛用を賜はつたと承つた事などもあつた。』と光榮に感激しつゝ、

『また或る時には斯ういふ畏多い次第もあつた。明治大帝には早くから陸軍の御軍服は召されて居られたが、海軍の御軍服は日露戦争當時から召しになられたのである。處が海軍の軍服は元々英國式に則つたものであつたが、その頃ある必要上、其の袖章に改正を行はねばならぬ事になつた。さうして其の事を元帥の西郷から大帝に進

言したところ、陛下には遂に御返事を與へられなかつたので、已むなくそのまゝ退出したところ、間もなく又再びその袖章の改正問題が持上つた。西郷も愈々困り果てたらしく、遂に我輩にその役を轉嫁して遁げてしまつた。我輩も仕方がないのでその役を引き受け、謹んで言上に及んだら、今度は意外にも殊の外の御機嫌で御裁可を賜つたことなごもあつた。』

とて感慨無量の面持をなし、更に鹿兒島の島津公邸行幸の際、其の設備の事にかつき、西郷の命令に不備の點があつたのを、我輩一箇で勝手に變更してやつたところ、彼れ西郷は前にあつた西瓜を鐵拳で叩き破しつゝ、激怒した事があつた等、何時になく珍談逸話を幾つも聞かされた。

いくら聞いても倦きぬが、大分時間も過ぎて居るし、お暇すべく、『それから横田も、加藤高明も近くお伺ひするかも知れぬが、參つたらばよろしく……』と頼んだ處、伯は、

『よし／＼承知した。前日電話を掛けてお越せ静かで此處なら何人にもごとくする氣遣はない。來たら逢うてやる。』

とて上々機嫌であつた。

犬養木堂の督勵と島田沼南

——大正十一年十二月十九日——

朝八時頃、四谷の犬養木堂邸を訪うた。寒い日であつたが、スチームも、ストーブも、火鉢もない、全然火の氣なしの、然も天井に頭のつかへる、監獄部屋見たやうな應接に押し込められて約二十分許り待つた。

例の煙管の雁首を、どてらに包んだやうな様子をして木堂犬養翁がやつて來た。さうして早速現内閣の無能無策を頭からこき下すと、彼も大に乗り出して來て、

『全く無能である。何一つとして出來て居ない。』と力を込めて裏書した。

『一日遅れると一日だけ行き詰つて國家の働きが取れなくなる。』と力説すれば、また、『その通りだ。』

と肯首く。それから高明加藤に逢うた事やら、牧野宮相に逢うた事や、後藤新平、

田中義一大將等の其後の経過に就き、差支ない程度に於て種々話をした。さうして此の際何とか大に考へ、方法を立て、現内閣を破壊せねば國民が助からぬ。さうして愚圖々々して居る間に、政友會の後繼内閣組織の準備が着々と進捗して居る事を話した彼も大に同感である旨を答へ、更に權兵衛の運動上、此の際に於て是非西園寺に逢うて置く必要がある。さうしてそれには加藤恒忠が一番政黨政治に關係がないだけに都合だから、彼れに紹介狀を貰つて行けと自分に勧めた。

それから自分は、『あなたも是非一度權兵衛に逢うて置き、現在から將來に亘る各種の話を交はし、諒解を得て置く必要があると思ふ。』と言つたら彼木堂は曰く、

『自分は逢ふ逢はんは問題ではない。逢ふ逢はぬに拘らず、我輩が何時も言うて居る如く、彼とは既に業に諒解が出来て居る。また大石も權兵衛が愈々出るといふことであれば、何時でも飛び出して來て助けると云ふて待つて居る。今度こそ是非とも遣らなければならぬ。兎に角大に援助をしてやるから……』

とて極力督勵の辭を浴せかけて居た。

それから犬養邸を辭して、引續き麴町中六番町の自邸に島田三郎氏を訪問した。

早速に案内された奥の書齋に通れば、主人公の沼南老は、何時に變らぬ例の惠比壽顔で、演説口調の能辯がそれからそれへと續く。自分も來意を話して負けずに時局を論じ合つたが、ついお喋舌が過ぎてしまひ言はんとした權兵衛論はまだ漸く足をかけた位の時に、新横濱市長の渡邊勝三郎氏が來訪したので、沼南老は、

『一寸失敬して逢うて來るから』

とて話を中途に立つて行つた。さうして約三十分も經つと、追つかけて大竹貫一氏が來訪した。惠比壽顔は氣の毒な程困り果てたやうな顔に變り、自分を顧みながら、『弱りましたね、如何いたしませうか。斷りませう……』と心配氣に立ちかけたので、自分はこれを遮り、

『イヤ、兎に角先にお逢ひになつたらよいでせう。僕はまた朝早くにでも更めてお伺

ひしますから、』と歸りかくれば、老は――

『これはまことに失禮しますね。けれども朝は來客がいろ／＼やつて來て落ち着きませんから、夜分――明晩に是非お出で下さい。さうして悠然お話をいたしませう。』と約束して辭し歸つた。

歸途本郷駒込の佐藤鐵太郎中將邸を訪ねたが不在であつた。彼の門前も、彼れの豫備になつてからは、氣のせいかも知れぬが、何となく寂しさに見えて居た。――

熱海に於ける愕堂との會見

――大正十二年一月三・四日――

三浦梧樓將軍と、尾崎行雄氏とを訪問すべく、友人の二人で午後二時半東京驛發の汽車で熱海に向つた。午後六時に眞鶴驛に下車したが、その時熱海行の自動車が皆買ひ切られて一臺もなかつたので、遂に輕便汽車に乗り込んだが、此の汽車はまたなか／＼の代物、大變な不輕便汽車で、途中で燈火は消える。天下の嶮ともいふべき數十丈の斷崖絶壁の眞中に差しかつては、ブレーキが利かなくなつて汽車が見る／＼うちに四五丁も坂路を逆に滑り落ちるといふ有様、乗つて居た女や子供は氣違ひのやうに泣き叫ぶ、さりとて飛び降りるにも降りられず、丸で生きた氣持もしなかつたが、それでも幸に別に怪我人も出さなつたのは見つけ物であつた。

漸く夜の十一時半頃に熱海に辿り着いたが、今度はまた、お馴染の旅館玉久が満員

で、如何にも遣り繰りがつきかねるといふので、其家の案内で附近の萬屋といふ乞食宿見たやうな旅宿に案内され、うす穢い奥の六疊に通された其室には亡目の六十位の老婆に病身の子供を連れて湯治に来て三ヶ月程前より間借をして居ると云ふので部屋は愈々拙だ十二時頃に、冷飯の固まつたのに鱈の焼いたので晩飯を食はされ漸くして一夜を凌いだ。

厭な夜は間もなく明けて四日の朝が来た。もう六時頃に飛び起きたら、如何にも新年らしい清々した晴天であつた。先づ温泉に浴して身を清め、二人で朝の食膳を圍んだ後愈々自分は屋崎行雄氏を訪問すべく八時が打つと直ぐに出かけた。出かけはしたが氏の宿屋が不判明だつたので、そのまゝ熱海警察署に行つて聞き訊した。巡査等は頗る丁寧に教へてくれた。停車場で俤を見つけ直走りにその宿所たる熱海ホテルに向つた。

來意を通すると、直ぐ『こちらへ』と氏の室に通された。處がその時既に二人の來

客があつて、話をして居たが、僕が割り込んだので尾崎氏は早速他の二人に『これは山本權兵衛伯の推薦者村上貞一君です。』と皮肉な紹介をしてくれたが、その一人は赤坂區長の中野某といひ、今一人は忘れてしまつた。

それから約半時間ばかり互に雑談に過したが、尾崎氏は『一寸諸君、まことに濟まぬが、』と時計を見ながら、『實は小生毎日十一時に湯に這入ることにしてあるので、自分の入る迄は何人も入らずに待つて居るやうなわけで、濟まぬが一寸失禮して入つて來るから。』と斷り、『で皆さん急ぎでなければ、悠然飯でも食べて話して行くやうに、』と言ひ遣して出て行き、約三十分ばかりで上つて來た。

そこで自分は早速に三人を對手に政治上の話を開始したが、二人の客はその後間もなく歸つて行つた。愈々忌憚のない本當の話が出來ると思つて喜んで居たら、尾崎氏は『ホテルで食事の用意をさせるから、是非一しよに食事をして話して行くやうに、』と勵めた。その時テオドラ夫人や、令嬢等が外庭で見晴のよい房州灣の波を眺めながら

頻りに遊んで居た。食事は強つて斷つて歸らうとしたら、尾崎氏はまたそれを遮つて、『では、此處の晝食は一時頃になつて居るのだから、それ迄の間でももう少し話してゆけといふので、とう／＼一時半頃まで話して歸つた。結局彼の曰く、

『此の場合、山本でなければ行き詰つた日本政界の革新は不可能である。時局を一新して現代國民の不安な生活を救ふには、權兵衛なら遣るであらう。然も若し此の際權兵衛が出るといふことであれば、彼の政友會にしたところが必ず彼を援助するであらう。若し假りに政友會が援助しなかつたにしろ、さうして飽く迄反對するといふ事であつたら、その時二三は斷然解散を敢行すればよい。さうすれば權兵衛は却つて、以前の政友會との關係もあり、その半数ぐらゐは權兵衛の許に集まるべく、憲政會方面からまた少くとも半数位は權兵衛黨が出来らうし、それに革新俱樂部の殆んど全部を加へて以て一九としたら、それこそもう人間が餘り過ぎる程の大權兵衛黨が出来るといふものである。だが然しこれは愈々となるまでは勿論政友會などには秘密にして、

なるべくは斯うした今の非常手段などを弄する必要のないやうに彼等をして援助せしめるやう取り計らひに努める方が得策である。普通選舉は是非とも斷行しなければならぬ。外交方面の打開もやらなければならぬ。さうして産業計畫の實施。軍備縮少問題に對する至善の解決を行ひ、國民生活の安定を期し得るに至らば、それこそ權兵衛の人氣は正に昇天の勢で上り來り、力強き國民の後援は、鳩然として權兵衛の一身に集まり來ることであらう。』

と往年の仇怨も、今日の場合、つるりと忘れ去つたかのやう。あゝ時局の變轉、政界の推移、轉た感慨に堪へぬものがある。終りに彼は、

『なほ自分は此の十三日に一旦歸京の上、二十日頃迄また一寸旅行して來るから、二十日過頃にまた其の後の狀勢を知らしてくれ。』

といふので其の約束をして引上げた。

『何時もながら尾崎氏は感じのよい人だ。』など、考へながら、急ぐともなしに歩いて

居るうち、不圖大正十年の七月、鎌倉のグランドホテルの別荘に家族一同で避暑して居た際、會見した時の事を思ひ浮べた。何でも食堂と應接とを兼ねたやうな客室に通され、二三雑談の後自分は、數年前より權兵衛伯に對する各方面の名士の意見を聴取した大體の模様を話して氏の感想を聞いたのであつた。處が彼れ尾崎氏は曰く、

『今日兎にも角にも首相候補者として話題にも上るやうな人々を見渡したところで、先づこれはいふやうな者はない。只だ山本伯なら、或は此の難局に處してズン／＼切り抜けて行けるだけの手腕と力倆を有して居るかも知れぬ。さうして先づ軍備の縮少を斷行し、行政財政の整理を、以前の内閣時代の方式でやつて行つたら、必らずや見るべきものがあらうと考へられる。山本伯は自分もよく知つて居る方である。曾て桂公と山本伯とが果して何れが力強いか——といふやうな事に就いて試して見た事があるが、矢張り桂は如何しても知の人であり、山本は意思の人であつた。後藤なども今日頻りに其の候補たらんとして焦つて居るやうだが、腹の据らぬ彼では到底見込がな

い。彼は元來浮々した、男で彼の相馬事件で入獄したのなども結局其の缺點から出たものである。如何も人間の性格といふものは、その若い二十四五歳頃に顯はれたのは百歳迄も依然として變らぬものである。彼の大隈侯などに自分は約三十有餘年の間接近して來たが、始終一貫の性格を續けて來た。後藤が誤つて出たにしても、手綱の無い亂馬の如きもので又復若い時の相馬事件のやうな事でも惹起する位が關の山で、危なつかしいものである。或る時自分が桂公を訪問したところ、後藤が先に來て對談中との事で、約三十分間も待たされ、後藤が歸つた後で桂に會見して居たら、まだ物の五分とも經たぬうちに、又もや再び後藤がやつて來た。そこで自分は桂に向ひ、後藤もなか／＼多忙を極めて居るやうでね、と言つたら、桂は、イヤあれはなか／＼氣の急しい男で、毎日六七回づゝもあ／＼して、ちよ／＼やつて來るのだ。然もその來る度毎に問題が變るのである。途中歩いて居る際などに、一寸思ひついて直ぐそれを持つて來るのだ。さうして十の中には漸く一つ位しか採り上げるやうな問題がないので

ある。物を建設する素質は多少有して居るやうだが、餘りに氣が多くて困る云々と桂が話して居つたが、實際その通りで少しも若い時の氣質が變つて居ぬから妙である。彼は兎に角何人か確乎した、たとへば山本伯のやうな人が舵を取つてやれば相當勢よく走る男。』

と話し、更に

『山本伯が若し再び出てやるといふ意思があらば、勿論出られぬ事もあるまいと思ふが、然し困難はなか／＼困難なものだらうと思はれる。』と話した事などを回想しつつ、ある間に、何時しか停車場附近まで辿りついて居た。

田中義一大將に薩長の提携を説く

大正十二年一月十日

雪降りの寒い朝であつた。九時頃田中義一大將を青山北町四丁目の邸に訪うた。刺を通したら副官が出て来て、『本日は直ぐ出かける事になつて居るので、遺憾ながらお目にはかゝれません。』と断るのであつた。『それでは何時頃お伺ひしたらよいか御都合を伺つて頂きたい。』と押問答してゐた折しも、田中自身が廊下口から玄關に出て来て、『お、村上君か。出かけようとしてゐるんだが、まア上り給へ。』といふ。案内のまゝに書齋に通ると、ストーブで暖められた可なり大きな室に、大きな火鉢を抱へながら讀みさして居た新聞紙を側のデクスの上に置きながら、如何にも威勢のよい態度で、『イヤ、なか／＼寒いね。どうだ、島村大將も氣の毒なことをしたなア。』と語り出した。自分も、『さうです。彼の人も全く惜しいことをしました。先年頭を打つてから

次第に悪く、死ぬ前頃にはまた家族の病氣など甚しく腦を悪くしたやうであつたが、動もすると少しは明瞭に判るやうな事もあつたが、命數どでもいふものか如何とも致し方がありません。引續いて加藤友三郎も病んで居るといふ調子。然し島村大將あたりは、今少しは生かして置く必要もあつたらうに……』

と大將の死を悼むや、田中氏は、

『もう此の次の元帥は加藤友三郎で、その次は陸軍の秋山好古かな。』

と言ふた。そこで自分は、

『秋山は果して元帥になるでせうか。』

と反問したら、彼は、否と言ふ代りに、極めて曖昧な態度で、黙つて微かに肯いた決して元帥になるやうな筈はないといふ暗示であることは明かに觀取された。乃ち自分分は、

『然し秋山といふ男は、なか／＼度胸の据つた、膽力果斷の男で、その點に就ては彼

の秋山眞之よりは幾分上のやうに思はれる。長谷川元帥なども、先刻自分に話した事には、秋山はなか／＼偉い奴じや。是非俺の後任として朝鮮總督にしてやらうと思つて居たとさへ言うて居た程である。』

と秋山好古の爲に肩を持つたら、彼れ田中はまた黙々として答へなかつた。そして却つて逆襲的に、

『政治のことは如何ぢやい。』

と來たので、待つて居たぞと言はぬばかりに、得々然として現内閣の無能政策を攻撃した。ところが彼曰く、

『實際困るの——。一體加藤は以前から知つて居る男ぢやが、政治などの事に就てはまだ素人ぢやからの——。元來の一海軍一方の人だから無理もないサ。』

『無論その通りです。先刻もお話した通り、彼れ加藤が内閣を組織した當時、その選任の過なることを、横田に向つて大に難詰した事もあるが、横田もそれ等の點を漸く

今頃になつて覺つたものゝ如く、——先日加藤に逢うて見たが、政治といふものには全くの無趣味、没交渉である。一體彼れが如きものを斯の時局多端の際に出した等の如きは、全く國を草紙にし、國家を玩具にするもので、國民こそ良い面の皮である。

と彼等當事者でさへ斯ういふて居たが自分も至極同感である。全體彼は一つの政策を樹て、これを實行するに於ては、若し政黨が反對するといふことであれば、則ち議會を解散してゐてもこれを敢行するだけの勇氣に乏しいから、丸で無意義に終るのみならず、國家は次第に危險に向ふ一方である。實際彼は何等の實行も出來ずに、或は政友會の色にもなれば、憲政會や貴族院の色にもなつて見たり、何等爲すことなくして只だ自己の延命のみをこれ事として居る。斯んなことなら、一時も早く豫備役にでも入つるとの。』と大に反對したる上、更に、政治、經濟、外交の諸問題、國民の思想問題、物價の暴騰問題等につき順次稅政を疊みかけ、此の際是非とも根本的に改造を斷行するに非れば、遂に日本は全く亡びるやうな形である。さうして此の際少くもこれ

が改造の任に堪へ得るものは、屢々言ふ如く如何しても山本權兵衛の外に一人もない。併も彼は自然の順序としての元老ともなるべき充分の可能性を有する人物である。將來大に爲す有るべき貴下などに於ては此の際是非彼の諒解を得て置く必要があるやうに思はれる。然も山縣公の没後に於て貴下の反對者は將卒を通じて益々多數になつて居るのみならず、その周圍に於ても貴下を援助するものは殆んどない。此の上權兵衛に反對されるのでは、全く世に出るべく立つ脚がなくなるといふものである。乃ち此の際須らく權兵衛と提携される方が萬事に對して得策である。何といふても此の日本は薩長が持ち出して來たもので、權兵衛もその五人の中の一人として樞機を握つて來たのである。薩長の軋轢等の如きは最早西南戰爭當時の昔の夢である。若し貴下と權兵衛とが提携出來たら、天下の民は期せずして集り來るべく、また貴下に於ては決して一武邊ではない筈である。長州の貴下に非ずして日本の貴下である筈である。』と説いた。處が彼曰く、

『俺は山本伯は一寸知つて居る。然し今逢ふと必ず人が彼是れ言うて面倒だから、』とてなか／＼『うむ。』とは言はなかつた。

止むなく再説を期して歸らうとしたら、もう正午迄には數分を餘すのみであつた。

二人の客が來て居るところにまた一人殖え出した様子に、さつさと暇を告げて玄關先に出て來たら、今來た新客といふのは、靴を脱いで上らうとして居た山下龜三郎氏であつた。自分の顔を見た彼はいきなり、

『やア相變らず活動だね。なか／＼やつちよるんだね。』

といふ挨拶、言下に自分も、

『貴下こそ相變らずやつちよるんぢやありませんか。』

とやり返したら、送りに出た田中大將は恰かも救け船にでも有りついたと言はぬばかりの元氣回復で、

『イヤどうも、此の寒いのに朝早くからやつて來て、政治ぢや、經濟ぢや、外交ぢや

と吹いて、吹いて、吹き飛ばして歸るところぢやでの——』
は罪のないものである。

清浦子に時局の難を訴ふ

大正十二年二月六日

朝六時頃山下龜三郎方へ電話をかけさせたら、『先夜あなたの方から電話のありましたその時から、風邪で寝て居ります。』といふことであつた。

それから大森の清浦奎吾子方を訪問した。田舎染みた、葉巻煙草を並べたやうな手をした女が出て来て、『奥さんですか。』といふやうな事を言ふ。

『御主人は？』

と聞くと、『どちらか判りませんが、『どいふので、『私は斯ういふものです。是非お目にかゝりたい。』といふたら、今度は三太夫が出て来て、玄關から二つ目の、清浦の居間になつて居る十疊の日本座敷に案内した。

すると彼れ清浦は、六尺に四尺もあるやうな、竹で編んだ、型のある大テーブルの

前に、五つ紋付を着込み、浪花節語りのやうな風をして、手紙を書いて居た。しかも摺れ切つたそれが海豚のやうな顔をして愛嬌を振り撒きながら、

『今直ぐ終わりますから一寸お待ち下さい。どうも書きかけて居りますから、なか／＼寒いですね。』と喋舌りつゝ、書き終つた書面を赤い中筋の入つた支那風の封筒に入れて、宛名を仁井田益太郎殿と書いた。仁井田といへば法學博士だが、さては現にやかましくなつて居る政府對樞府の上奏問題に關する顧問にでもなつて居るのかなと思つた。

愈々對談となつたが、まづ自分の來意を述べて、政治上に於ける日本の變化と將來に及び、『實に明治維新の大業は、明治天皇の崩御を一期として聊か降り坂に向ひ、現今に至つては愈々そのドン底に墜落すべく危険の域を辿りつゝある。さうして兎もすれば、忽ち急轉直下せんとするやうな傾向さへ示して居る。即ち若しこのまゝ放任して置かんか、最早到底救済も潮縫も、全く見込みなからうと思はれる。政友會は多數を恃んで只だ私慾黨利に汲として日本の經濟を破壊し、教育の缺陷社會制度の不備は

更に思想の悪化を助長し、内政外交の失態は愈々國民の生活を不安に陥れつゝある、と説くや、彼は曰く、

『なか／＼君の御意見は尤もであるが、要するに結論は如何になりますか。』

との逆襲である。乃ち僕は、

『結論は簡明です。此の現内閣を倒すのです。斯の如き内閣を倒すのが即ち國民を救ひ出し國家を救済するの途だと考へる。斯の如き内閣が一日延びれば一日の危険を増すのだ』と言ひ放つた。すると彼れ清浦は、

『政治問題はなか／＼君の言ふ通り、困難に困難を重ねて來た。殊に外交問題の如き對支問題といひ、英米の關係といひ、實に容易ならぬものである。然しながら政府といふものは、たとひ何の政府であつても、先づ成るべくは助けて行かなければならぬものである。』

といふ、僕は言下に

『それは然し、現在には當て嵌りますまい。』

と駁し、

『一體今の加藤友三郎などゝいふ男は、今日の場合全く首相などゝいふ柄ではない。私は彼の出た當時、國民は最早、二三元老や政友會の黨利私慾のために亡はされるとまで憂悞し、直に政友會の横田千之助に逢ひ、如何した理由で彼が如きを出したか。彼が如きは只だ一海軍の技術者ではないか。政治を解する男ではない。今日過れる經濟政策が失政の原因となり、延いては外交の失敗を重ね來り、帝國の經營愈々行き詰り居る際、彼が如き一技術者を出して難局に當らしめるなどゝは、實以て正氣の沙汰ではない。政黨のために國民を犠牲にする大なる僻事ではなくて何だ、と詰問したことがあつた程である。』

と述べ、且つこれに對して彼れ横田千之助も同意を表したることを補足したる上、愈々論歩を進めて曰く、

『即ち彼が如き無能有害なる者を一刻も早く罷めさせて、政友會のためとか、憲政會のためとか、乃至は元老の關係だとか、知己友人が如何したとかいふやうな、一切の情實から離れて、一意只だ國家、國民のためといふ紀念見地に立つて、敢然今日の危急を救ふて頂きたい。さうしてそれには明治大帝を補弼し奉つて維新の大業を築き上げられたる貴下や、西園寺公の如き元勳の懸命の骨折を煩はさぬ以上、決して今日の如き難場を支へ、復興の實を擧げることが覺束ない。』と斷じ、更に、

『貴下等にしてもまさに彼の――將來郷等に俟つ事多しと先帝の御言葉を賜り、御優遇を恭うして、位最早人臣を極め居るからとて、後は野となれ、山となれとは申されまい。是非とも此の際救済の途を講すべく一肌抜いで貴下等の如き維新偉傑の血を現代の青年に注入して頂かねばならぬ、といふ一念から、小生不肖と雖も既に今日迄、幾多各方面の凡ゆる有力者に説いて廻つて居るが、十人は十人迄、百人は百人まで一人として異議を挾む者がない。只だ然し、それならば果して誰をして實際に此の難局

に當らしむべきか、といふ段になると、矢張り貴下や西園寺公の如き元老を實際直接の當局者として煩はすことは氣の毒である。飽く迄高き元老の立場から睨み渡して、眞に此の難局に堪へ、復興の大任に適すべき役者の産婆役として、渾身の努力を傾倒されんことを切望し、併も其の難役者として此の傾きかけた舞臺に立ち、疲れ果てた國家を背負つて世界の表面に乗り出さうとするには、伯山本權兵衛一人を措いて外になし、といふ一般の空氣になつて居るが、御意見如何。』

と結んだら、子は曰く、

『ウム彼れはなか／＼遣る男だ。膽力といひ、決斷力といひ、まづ今日彼の右に出づる者はない。彼んな事で引つ込んで居る事は人物經濟の上からも遺憾である。何か機會を見て、引き出してやらうと思つて居るのだが、然し彼れには如何も後援者が無いのと、それに餘り横暴な處があるのでまことに遣り悪い。松方も西園寺も、彼れの横暴には一寸困つて居るらしいから。然し出せば無論なか／＼に遣る男である。』

と言つた。それで自分も亦た一つ附け足して置かうと思ひ、

『全くです、もう一般に彼の如き者を出して見たいといふ空氣は、非常に出来て来て居るのです。それは一つは永年引き續けて来た政友會の横暴と、高橋、加藤等の如き貧弱な内閣が出現して、國民を玩具にした反動であると思はれる。そして只今のお話ではあつたが、若し權兵衛が愈々出るといふ事であれば、その後援者などは必らず御心配なき程充分に出来ます。即ち政友會は以前の關係もあり、半數位は援助者があり、憲政會にしたところが其の通り、革新俱樂部は殆んど全員を擧げて加はるとすれば、寧ろ餘分な位の後援者である云々』と言ひ張つたら、彼れ清浦は『それも一つの議論ぢや。なか／＼君は面白い變つた議論をする男だ。少し時間をこしらへて緩然また話をしやう。けふはまだ來客が二人控へて居るので、これだけに置いて貰ひたい。』

とて分れた。約二時間位の會見であつた。

清浦子の意嚮を山伯に傳ふ

——大正十二年二月十日——

前夜の八時であつた。芝愛宕町の三州俱樂部から、一通の書面を齎して山の内一次氏の急使が來た。さうして君が權兵衛伯に逢ふ前、即ち今夜中に是非面會したい。若し遅くなるやうであつたら自分の家へ泊る事にしても是非今夜中に逢へるやうに都合してくれ。といふ懇望であつた。けれども自分の方にも差支があつたので、電話をかけて無理にそれを斷つた。

ところが山の内氏は『それでは萬止むを得ぬから、明日伯の方へ行つた歸りにでも立ち寄つてくれ。さうすれば自分は明早朝熱海に行かなければならぬ豫定を延ばして午後にするからといふ事なので、それも斷るに忍びず、山本伯邸よりの歸途立ち寄る事に約束した。さうして十時頃寢に就ては見たものゝ、如何なるわけか、妙に昂奮し

過ぎて殆んど一睡も出来なかつた。

漸くにして十日の曉になつた。自分はもう堪らなくなつて、六時頃から飛び起きてしまひ、仕度を整へて高輪の伯邸に出かけた。もう案内もなしに奥の應接に行くと、二分間も経たぬうちに、例の調子で、袴羽織に威義を正して威勢よく伯權兵衛がやつて來た。『イヤー前日は失敬した。』

と先づ先日風邪のために自分に逢はなかつたことを辯解して、二三世間話の後、例によつて政治上の話に入り、外交、財政、思想上等各方面より現在の状況を論じ、若し此のまゝに維持する曉に於ては、日本の生命もいよいよ永くて十ヶ年を持続し得まじき事を痛嘆し、其の爲自分は其の後松方侯、清浦子、加藤高明、三浦梧樓等にも屢々會見した次第を話し、特に清浦子に對しては殆んど遺憾なき迄に所懷を披瀝して、大體の諒解を得たる顛末を略述した。即ち、

『政治から經濟外交等すべての問題に亘つて所感を述べ、今日これ等の難局を救ふべ

く愈々貴下と西園寺公の私心なき高配に俟つの外ない迄に行き詰つて居る。そのため自分も今日迄凡ゆる諸先輩、有力者間を歴訪して、何等かこれに處すべき最善の方法につき意見も聞き廻つたが、それ等の政治家、實業家、教育家、學者等皆悉く口を揃へて、現代の如き内外共に行き詰つて、最早二進も三進も行かなくなつた大難局を打開すべく、到底並普通の者の能くし得べき事ではない。然りとて一部井蛙の輩の言ふが如き、清浦子や西園寺公の如き、最善最良の政府を作つて國家の進展を圖るべき元老連が其の局に當るべきでもなければ、また當れるわけのものでもない。斯の際に當り何れの方面より見るも唯一無二の好適任者は山本權兵衛伯只だ一人である。何人と雖も行き悩む政黨政治を眼中に置かず、一旦已れの信するところ、悉く勇往邁進、ドシ／＼やつつけ退けるやうな大人物でなければ、傾きかけた今日の如き難局は到底收拾不可能である。斯ういふ者を一日も早く引き出して、眞に國家國民のために働かしめる産婆役こそ、即ち貴下等元老連の、何を若し置いても勤めねばならぬ責務である。

さうして明治大帝の御遺志にも酬^{むく}ゆる所以である。と説いたら彼清浦子は曰く、——
 彼は固より力もあり、實行の材^{ざい}で、まことに惜しい人である。我輩も前から、彼をあ
 のまゝに葬つて置くことは不經濟であり、國家の損失であると思ふて居るが、唯だ然
 し彼には、少し德望の缺けたところがあるのと後援がない。その上に少々困つたこと
 には横暴で、なか／＼面倒な男だからウツカリ手が出せない。と言つた。それで自分
 は言下に、その御心配は斷じて御無用である。若し山本伯が愈々出るといふことであ
 れば、政黨關係は斯の如くなり、後援は斯々の筋に十二分に在る。横暴云々等の如き
 は時と場合と相手の如何によると委細に亘つて説明した。すると彼は——それは一つ
 の明案である。とてまた近い中に面會を約して分れた。」と話をした。

黙^{だま}つて聞いて居た伯權兵衛は乃ち曰く、

『あれは我輩もよく知つて居る。我輩と一しよに閣僚になつて居た男であるが、な
 か／＼に摺^すれ切つた奴^{やつ}で、口上手な男だから、たとひ兎や斯う言ふたにしろ、果して

何を語つて居るのか解つたものではない。』

とて殆んど聞き流して居た。

餘り張り合ひのある氣もされずに、また二三の雜談を交はして歸つてしまつた。
 妙に惱まされた山之内からの手紙といふのは斯うであつた。

(前略)小生一昨日熱海に參り昨日歸京、明日又同地に出掛度積に御座候就ては甚だ
 以て御氣の毒に御座候得共、今夜中には是非御面會願度候間、芝愛宕町三丁目二番地
 三州俱樂部迄御光來被下間敷哉御願申上候、今夜十一時頃迄は同所に居る積に御座
 候も萬一唯今御外出にて、御歸宅が餘りに遅く相成候際は、小生宅へ御泊り掛に御
 出被下間敷哉、山本伯方へは明朝小生方より御出相成候は、反て御便利と存候、
 萬一十時半迄當方へ御出無之際は小生宅へ御出御一泊被下候ものと認め、小生も歸
 宅致し候間云々(下略)

二月九日午後五時、三州俱樂部

山之内 一次

村上貞一殿

追て萬一當方へも小生宅へも御出被下候義不相叶事情有之候はゞ、三州俱樂部
(芝二四一六)へ電話御掛被下度願上候

田中將軍遂に諾す

大正十二年三月九日

朝六時頃に自宅へやつて來た日匹信亮氏の自動車に同乗して、海軍省に志佐經理局長を訪ひ、更に軍令部に野村吉三郎少將を訪ね、矢張り日匹氏の自動車で青山の田中義一大將邸に着いたのは午前九時頃であつた。

日本間の應接で約二十分も待つた後大將に逢つた。先づ政友會の内輪騷動うちわさわどうの事やら、憲政會の行動、變遷等につき話した後、

『屢々お話した事ではあるが、斯の如き今日の場合、如何しても彼れ權兵衛の如き人物が出て局面の打開に努めなければ、國家の前途は知るべきのみといふことに一般の空氣が傾いたいて居る。政界のゴタ／＼も近く必らず起らねばならぬ形勢に進んで來て居るのだから、それ迄の間に、餘り忙しくならぬうちに一つ權兵衛にお逢ひなつて置い

た方が得策と思はれる。さうして若し貴下に於て、此の際直に權兵衛にお逢ひになることが御都合悪いといふことであつたら、その前に先づ財部大將にお逢ひになつて置く方が便利と思はれる。いろ／＼と此の際に於て、内閣乗り取りの運動などを企てゝ居る者もあるさうだが、それ等は只だほんの一部の騒ぎで、何等具體的な、念とすゝるに足らぬものである。自分等の實際に於て各方面に當つて見た結果では、何れも權兵衛の出馬を以て當然の歸結となし、さうして若し權兵衛が出るといふことであれば、極力援助するといふ者のみである。その重なるものの中には犬養、大石、後藤、平沼等あり、田もまた人を以て探つて見たら、有力なる援助者であり、齋藤實は申すに及ばず、西園寺邊りでさへ、竹越與三郎あたりから様子を探つて貰つたところによると、矢張り依然として従前の如く權兵衛には非常な諒解を持つて居る。松方侯にはまた先刻自分が再三逢つて、その方の關係も極めて都合よく行つて居るといふ始末、誰か何と騒ぎ廻つたにしろところが、最早權兵衛のものに極つたものである。』

と息を繼ぎ、更に一步を進めて、

『併も一度彼が出たとなれば、西園寺、松方共に老衰に入つて居るし、而已ならず西園寺公の如きは、今日最早餘り政界の事などには携はりたくないと云ふ風が見えて來た様子でもあり、愈々權兵衛の純然たる元老として活躍すべき時代も到來すること、思はれる。元老打破といふやうな事も一部若い連中の間には口にされても居るやうではあるが、然し今日、畏くも先帝の御遺業の一として、また攝政宮殿下には御年尙ほ未だ御若く、これから色々と世界的の御研究に努めらるべき場合であり、陛下の御病氣も一寸御恢復の見込みもないといふことであれば、如何しても輔弼の臣にして世界の大局の見える、偉大な力のあるものが必要になつて來ると思ふ。さうなればたとひ元老打破など、騒いだにせよ、まだなか／＼左様なわけには參らない。また一般世間から見ても、山縣公と權兵衛とは一種感情上の經緯から、公の最後迄融和しなかつた點があつたにも拘らず、若し貴下も今權兵衛と共に手を握つて國家のために起たうといふこ

とであれば、權兵衛の好感といふものは更に一層の深きを加へることゝ思はれるのみならず、また所謂舉國一致の實にも適ふ所以であると思はれる。而して一朝また他日に於て、若し貴下が乗り出すやうな場合が到來したにしても、貴下一人だけでは、如何に地駄ん太踏んでも何にもならぬ。殊に彼の山縣が多年勢力を握つて、今日迄政權を自由にして來た關係から、その歿後に於ては、貴下の周圍は陸軍部内に於てさへ非常な反貴下熱が湧起しつゝある位、餘程組立てを巧くやらぬと浮ばれない。さうして若し又始めの組立を誤つたら如何なる英雄でも枯木になり果てゐることは更めて申すまでもない。徒らに地方的感情などに禍ひされて國家の大局を過るべき場合ではなくなつて居る。苟も力あり、志ある國士は斷じて逡巡、傍觀の秋ではない。是非此の際進んで權兵衛に逢はれ、諒解を得て置くべく、先づ財部に逢はれる段取りを作らん。』

と説き、尙ほ權兵衛にしても、時々蛤御門等に於ける薩長聯合の話などをして、貴下には好感を表して居る位であるから、貴下にしても此の際彼を捕まへて置く事は管

に貴下一身のたのみではない所以を附け足した。すると彼れ田中は、

『それは實に屢々君から聞く事であるが、まア色々とその空氣も出來て來て居るやうでもあり、一つ大にやつたらよからうと思ふ。然し今日自分の立場として、權兵衛伯に逢ふといふことは果して如何かと思はれるが、それでも強て逢へといふなら逢つて見よう。』

と明言した。さうして更に語を繼ぎ、

『實際此の時局は重大である。外交問題でも非常な苦しい立場になつて居る。最早とも加藤總理では駄目である。彼は政治の人でないばかりでなく、唯だもう政友會の言ふがまゝに引きづられて居るに過ぎない。これでは不可ぬ。遣るならば大に自分の主義政策の實行に猛進せねばならぬ。それには議會の解散を行つても斷行するといふだけの『力』と『勇氣』がなければ政治を執る資格がない。その邊になれば君の言ふ通り、山本伯ならば遣つゝけるかも知れぬし、まだ遣り通せるかも知れない。』

と語つた。そこで自分は、

『何をいふても日本の今日は上、明治大帝の如き偉大なる英傑が現はれ下、山縣公の如き八十有五六歳の高年迄饗^{くわくしやく}饗^{くわくしやく}として國事に奔走した元勳を始め、幾多維新の俊傑等が努力の賜で、これを今繼承^{けいしやう}して大に盡瘁^{じんすん}粉骨^{ふんこつ}せねばならぬ貴下等にして、一朝若しこれを覆^{くつ}へすが如き事があつたら、これ等英靈に對して如何とも申しわけがない筈である。是非屢々申上げる如き計畫の下に奮起^{ふんき}が願ひたい。』

と勸めたるころ、彼亦た、

『その通りだ。權兵衛も援助しよう。さうして財部にも、權兵衛にも逢ふと云ひその段取りをする事に約束して分れた。』

又復た田中大將に迫る

大正十二年三月十五日

早朝犬養老を訪問して見たが、病氣中といふことで面會が出来ず、その足で又復た田中大將郎に押しかけた。早速會見、刻々に變る時局の急迫より、現内閣の到底濟度すべからざる所以を痛撃し、最早一日たりとも猶豫逡巡すべからざる危期既に到來せる秋なることを極説して對策に及び、

「此の場合國家に對する眞劍味を有し、眞こ力倆を有する者であつたら何人でもよい。唯だ黨利私慾を貪り、子孫の榮達等のために政權を狙ふやうな輩が出るのでは眼も當てられない。然も今現に一個の謀主となり政權乗取運動に躍起となつて居る某の如きさへある。然しながら彼等の人格たるや、唯だ全く單なる一箇の事務員格に過ぎず、私利私慾のためには國家も社會も眼中にあることなく、皇室の存在する意に介せ

ぬ程の不逞漢である。然も斯くの如きものを彼れ政友會は、頻りに提携援助せんとし
て暗中飛躍に日も尙ほ足らずに居るとは、イヤハヤ全く以て開いた口が塞がらない。
それ等同類項中、後藤などはまだ少しは取り得のある人間ではあるが、それにしても
元老諸公の信用などは毛頭もなく、彼れの運動して居るといふやうな噂を耳にして
も、頭から一笑に附されて居る位のものである。また彼の加藤高明の如きも、常に憲
政常道論を説いて、政變のある毎に早くも閣員の役割迄も定めて、大命を拜すべく參
内の準備をさへ整へて居るといふ事だが、これ亦た硝子箱の中に泳いで居る金魚を、
外から猫が狙つて居るやうなもので物になる筈はない。此の間に於て獨り彼れ山本伯
の如きは、嶄然としてシーメンス以外には私利私慾や、虛名のために出るやうな人物
ではなく、誠忠誠意眞に國家、國民のために眞劍味を有する一人者と目して然るべき
ではあるまいか。人心の歸向既に斯くの如く、愈々近く權兵衛伯も乗り出すことにな
るかも知れぬが、それにしても一日も早く彼に逢ふべく貴下の得策と思ひ、先刻の約

束もあり、既に財部の方へも其の段取りにつき話が濟んで居る。會見の日時は先づ貴
下の御都合を尊重して取極むべく、場所は双方の協定で決することに計らひたい、』
と述べ、大凡の日時も、場所も某所といふことに案を立て、愈々財部大將を先口
に、權兵衛山本伯に會見の段取りとなつた。

將軍田中と財部

——大正十二年四月二日——

約十日ばかり前の三月廿三四日頃、青山北町四丁目の田中將軍邸に於て、豫ねて申合せをして置いた、財部將軍との會見の件につき、

『屢々申上げた通り、貴下も財部氏も將來共に軍政上に携はり、國家のために盡さねばならぬ重要な代表的人物であるので、此の際は非一つ逢つて諒解を得て置く必要がある。殊に加藤の如き、華盛頓會議の大失敗を演出した結果、今やどしどし軍備の制限を實行しつつある有様、さうして日本の名物であつた軍事思想にも大なる悪影響を及ぼし、既に陸軍や海軍に従事して、今後大に國防上の研究に没頭しようとしたやうな多數有爲の士も、是等海軍縮少や、人員の大淘汰等によつて非常な恐怖心と、失望の念に驅られ、現に海軍兵學校の如き入學志願者の一大激減は勿論、折角の上級在學

生と雖も見込なき將來の海軍生活に愛想を盡かし、實業界、勞働界等に鞍替へをするものさへ數あるやうになつたといふ話、まことに由々しい國家將來の大問題であると思ふ。是等重要なる對策に就てもまた今の財部は申すに及ばず、國防上の大立物たる山本權兵衛などにも是非逢つて隔意なき意見の交換をやつて置くのが貴下等の責任である。』

と説くや、田中將軍は曰く、

『それはもう此の前、君にも云つた通り、財部にも、山本伯にも逢ふ。順序としマア財部に逢つて、それから山本伯に逢ふ。』

とて共に前回に於て田中氏の銓衡に一任して置いた筈の、時日と場所の打合せを行つた。處がそれに就いて田中氏は、

『前回君に逢つた數日後に、不圖とした事から上原元帥に其の事を話して見たところ、上原は財部も自分は懇意だし、何なら家で逢つたらよからう家なら何時でも差支

ない。併もといふ厚意であつたが。』

といふ事で、遂に會見の場所を大森の上原元帥邸、時日を四月三日の午前九時からといふ事に段取りをつけるべく打合せが出来た。それで自分は直に横須賀鎮守府に財部長官を訪ひ、右申合せの結果を通じ、その都合を聞いたところ、財部氏は、

『それは委細承知した。萬障繰り合して行く。』

とて早速の快諾であつた。これを田中氏へも通じて茲に愈々双方共に會見の約が出来上つた。處が四月に入つて、いよ／＼切迫した當日の前一日正午頃、突如田中氏から左記書面が速達で配達になつた。曰く

舌 代

過日は甚だ失禮仕り候

其の節御約束致候明三日大森にての會合には小生頓と大祭日なるに氣着かず約束致候處當日は大祭日につき賢所の參拜有之爲めに午前は參ること不相叶候間右様御承

知被下度候、若し不得已は午後に致すか、出来得れば他の日に御取り替へ被下度候
右取り急ぎ御通知申上候

二日

義

村 上 様

といふ延期の申込みである。そのため已むなく財部大將方へも此の事を通じて、他日を期することにした。

財部大將との會見は上の如く一時蹉跎の已むなきに至つたが、一方山本伯に對する會見の段取りについてはまた、その後伯邸に到り、

『彼れ田中は常に眞劍味を以て國家の事を考へ、彼の華盛頓會議問題などについても色々と憂慮して居る者でもあり、色々と此の際國防の大立物たる貴下に逢つて、現在並に將來の問題に關する高見を伺つて置きたいといふ事である。是非國家のために一つお逢ひになつて種々御指導を願ひたい。』

と申し入れた。處が伯は

『田中には我輩も一度か逢つた事があるやうにも思ふ、それに田中の事に付いては色々云ふ者もあるが逢つても一向差支はない。』

とて内諾を與へ、いろ／＼とまた薩長聯合の關係とか、坂本龍馬の話とか、自分と山縣公との關係とかにつき數時間に亘つて話をなし追つて時日の都合を定むべく約して引き取つた。

武藤山治氏を大阪に説く

大正十二年六月八日十日

その頃商工黨を組織して、盛んに政治運動に活躍を試みて居た武藤山治氏を、數回丸の内帝國ホテルに訪問して、是非此の際山本權兵衛伯を援助して彼を引出し、彼と提携すべき事の得策なる所以を説いたところ、彼れ武藤氏は、

『それに就ては如何も東京では多忙過ぎて、充分落ち着いて話が出来ない。大阪でならば多少暇でもあり、緩くり話も出来るが、』

といふので、月の半頃大阪に向けて東京驛を出發した。非常に雨の降る日の朝八時頃であつたが、大阪梅田の驛から自動車で、府下芦谷の觀音林なる武藤氏の自邸を訪ねた。處が今朝早く出かけて留守だといふ事だつたので、更に行先を尋ねたら、兵庫の鐘ヶ淵紡績に行つて居るといふ。直にその方へ自動車を走らして、

同九時半頃に着いた、さうして門口に自動車を待たして置いて、二三町も奥の方にある武藤氏の事務所に行つて案内を求めた。處が横着なる事務員等は、自分の來意も知らず、また取次ぐべき處まで取りつぎもせずに「來客があるから、」など、勝手な口實を弄して斷るといふ始末、餘りの非禮に些かムツとした自分は、

『イヤ然ういふ筈はない。武藤氏とは既に東京で約束があるので、そのため本日わざ／＼やつて來たのである、斷じて謝絶など喰ふ理由はない。更めて取次ぐべし。』

と高飛車に取次のやり直しを命じた。さうして約二十分ばかりで、前とは打つて變つた慇懃な態度で武藤の事務室に案内された。乃ち自分は曰く、

『貴下の今回の運動に就ては、自分は衷心から共鳴を以て成功を祈るものであるが。』

唯だ茲に一つお話したい事は、商工黨といふ局限的の看板を掲げて運動される事である。元來商工業者と言はず一般すべての、今日の實業家と稱する者の多くは、殆んど唯だ自己の利慾のためには、國家も國民も悉く犠牲にして敢て意とせぬが如き者のみ

なる中にも、特に大阪の如き其の傾向の最も甚しい中心地に於て、嶄然として眞に現代時局の危機を憂へ、一意國家のために貴下の奮起を見たことは、正に是等一般實業界及び國民の間に、大なる警鐘を亂打したやうなもので、これによつて眼の醒めぬやうなものは恐らくあるまいと思はるゝが、唯だその商工黨といふが如き、狭い局限的な運動といふに至つては國家のために痛惜を禁じ得ぬものである。商工業者のビジネスそれ自身のためには、或は何物をか得られぬこともないであらう。然しながら商工業者のみで、此の時局の改造が出来るわけのものではない。即ち同じく遣るなら、どうせ、もう少し大きな範圍で、一つ全國民と共に日本の改造發展を期するといふ事でありたい。マークを掲げるならば、是非とも一つ大日本といふ看板を懸して欲しい。堂々と大門から出發せずに、コソ／＼と潜り戸から出るのでは餘りに残念である。どうせ遣られるならば、——俺は商工業者は勿論、國民全體のために此の腐敗したる政界を革新し、經濟立國を叫ぶものである。自己の身體、財産の如き、擧げて其のため犠

牲にしても意とせぬ者である。これに同意する憂國の士は共に來つて協力事に當るべし——といふ事で躍進され、同時に政府を作るといふ處まで進まなければ駄目である。それを如何いふお考かは知らぬが、只だ單に商工業者三十名か五十名かの團體を作つて見たところが何等の效果もあるべき筈ではない。只だ犬養の、國民黨の二代目を繰り返す位のものに過ぎない。然しそれでも政府といふものに結びつけてやるといふ事であれば、人數に於てたとひ三十人五十人の少數でも、力をなすこと非常なものである。政黨を組織すると同時に政府を作るといふことは、苟も大を成さんとする者の忘るべからざる事ではあるが、將來は別として今日現在の情況にある貴下としては、まだ直接、實地に政權を執るといふわけには參るまい。矢張り今暫らくは現在に於て力もあり、可能性もある者を先づ押し立て、遣らせるといふ事が最も意義ある運動ではないかと思はれる。それには自分は今日迄長年の間、果して如何なる人物が其の任であるか、國民は果して何人を要求して居るかといふことにつき、全國の有力者五百名

以上の意見を聽いて居るが、それに依ると、今日山本權兵衛伯一人を措いて他にない事になつて居る。即ち此の際先づ一つ此の權兵衛を援けて頭を作り、それから胴體を作るといふことであれば、たとひ指一本位に値するやうな小政黨が出来たにしても、血液の循環した、活きた働きが出来るといふものである。』

と説き、現在の首相候補者として五六名の人物を挙げ、一々批評を加へて權兵衛の最も適任なることを力説した。ところが武藤氏は答へて曰く、

『自分も至極同感である。なか／＼彼の人は力のある大きな人物である。是非一つ此の關西の空氣を作りませう。一體此の自分の政黨運動を起すについては、色々と親戚、知己の間に大反對もあるのだが、然し自分は一旦遣りかけた以上は飽く迄もやり通す積りである。然も自分がこれを遣るについては、唯だ政黨のみでなく、すべての現在の不用なる諸官省の整理、國防の調節、産業の發展其の他各種の方面に亘つて、根本的な改造を加へたいといふに在る。』

とて、色々と政策上の話などをなし、中食を共にしながら話は盡きず、遂に午後三時半頃になつたので辭し歸つた。

處が馬鹿氣た事には、朝から乗り廻した自動車代が筧棒^{さげぼう}な、意外な多額に驚き、些か歸りの旅費を作るべく神戸に山下龜三郎氏を訪ねたら、一昨日歸京したとて不在。それから矢張り神戸の金子直吉氏を電話で聞き合したら、これ亦た今朝東京に行つたといふこと。已むなく大阪宗右衛門町の大島屋で、時計のお陰で舞ひ歸つた阿々。

大石翁の豫言と督勵

大正十二年八月十三日

大石正巳翁は、前後四ヶ年に亘つて自分の運動に賛意を表し、爾來新聞雜誌其他に音樂入りではやし立てゝ呉れた、折りにはボリレイを援けて後援してくれた人である。加藤首相の病勢も愈々募り、政變の雲行も愈々切迫して來たので牛込辨天町の小粥に衣類を預けガソリンを作り八月十三日の午後、俄かに兩國驛にかけつけ、大石翁の別莊を訪ふべく那古船形驛^おに下りた。山田屋といふ旅館に一泊して、翌十四日の早朝、山麓の寺院の如き大石別莊に俤を走らした。

ところが家人の曰く、『それはわざ／＼御折角のところ、去る九日に東京の方に歸られました。名分中野の本邸の方に居られる筈です。』といふので、そのまゝ引き返し來り、その翌十五日に中野の邸を訪ねた。さうして翁の主張は斯うであつた。

『先づ憲政會と革新俱樂部との合同を計らなければならぬ。たとひ權兵衛内閣が出来たにしても、これがバックになるべき政黨がなければ、折角成立はしても直ぐ投げ出さなければならぬやうな事では困る。どうしても憲革合同のバックを作つて援助させなけア駄目だ。さうしてそれには、如何しても加藤と權兵衛とを逢はせる工夫をしなくちゃ不可ん。』

といふのであつた。それで自分は、

『然し、犬養と加藤とは如何しても一しよにはなれぬでせう。』

と言つたら、彼は、

『否、山本が間に立つといふことであれば、必らず解決はつくと思ふ。また革新俱樂部にしても憲政會にしても、今日の如き状態で、小さいのが別々になつて、思ひ／＼にやつて居るのでは、もうとても天下が取れる見込はない。誰にしたところが、——イヤもうこれは到底末の見込はない。と斷らめをつけてしまつて、第一に金を出すも

のもなくなるといふわけのものぢやないか。現に、憲政會などに對する地方の空氣などは、近來著しく斯ういふ風に傾いて來て居るやうである。地方の憲政會を地盤にして代議士候補に立たうといふ者も、我輩のところへは澤山來て居るが、それ等は皆何れもさう言つて居る。到底出られる見込はないから見合はせると言つて居る程である。のみならず一般の空氣がもう今日彼等を離れて居るやうである。此のまゝ、愚圖／＼して居るのでは、最早到底政友會の喰ひ物にされるばかりである。如何しても今言ふ憲革合同問題の必要が急務になつて來る。何は兎もあれ、如何しても此の際先づ權兵衛と高明とを接近させる勞を取るべく、さうして田中(義一大將)も逢ふといふなら是非逢はしたがよい。後藤は先刻一寸或る筋から聞いたたら、君が奔走して逢はしたさうだが、それは全く巧い事をした。それから次いでは貴族院の水野、青木、黒田等の如きも逢はせて、夫々諒解を得ちよくが良い。まア今度は如何しても權兵衛に來るぢやらう。如何しても來なければならん。政友會にした處が、あの高橋ではもう到底取れ

る筈はない、憲政會にしても、たとひ間違つて引き受けて、直ぐ解散でも行つて總選舉をやつて見たにしたところで僅に百二十名位しかのものにならず、一夜の間も持ち切れまじく、それこそ經濟界には大攪亂を生じ、人心忽ち動搖し出して來るのぢや、これ亦た物にならん。結局權兵衛といふ君の計畫に落ち着くより道はないといふ事になる。折角大に奮闘してやれ。犬養も先日逢つたが、これも大に援助してやらうと相談して置いた。』といふ事であつた。

風雲轉た急なる二週日

——大正十二年八月十四日より廿八日迄の二週間——

八月十四日、早朝後藤子郎を訪うた。さうして早速、

『昨日加藤首相に接近して居た某海軍中將につき、最も確實なる病狀たんようを探聞たんぶんせる結果によれば、既に唯だ時機の問題となつて居た彼れの病勢も最早刻々と危篤きとくに陥り、愈々もう今日か明日かを待つのみと急迫した。さうしてこれを耳にした政友會や、憲政會いちはやは逸早くも既に必死の活動を開始し、或は政友會の某幹部などは、早くも横田の特使とくしとして齋藤實を勸告すべく朝鮮に急行したとか、或はまた一面では田を押し立てゝ頻りに暗中飛躍あんちゅうやくを始めたとか、凡ゆる思ひの運動が四方八面から開始された様子、最早到底逡巡たうしゆんの時ではない。色々政黨の經緯いきうとか、箇人の關係とか、元老の勝手とか、都合とかいふやうな情實ではなく、眞に國民全體の擔ぎ出す、所謂舉國一致の

政府を急造せねばならぬ。而して此の場合、是非とも多年各方面の賛助を得て来た権兵衛伯を引き出し、貴下と共に組んで其の局に當られる事は、今日の場合、當然唯一の歸趨であり、國家國民の最善の處置である。若しそれ一朝誤つて、此の際從來の如き間に合せ内閣等の出現あらんか、それこそ全く國を失ひ、到底臍を嚙んでも及ばぬ大事である。』

と力説するや、彼れ後藤子は意外の平氣な態度で、曰く、

『それは如何にも重大問題だが、餘程慎重に考へないと不可ぬ。然しまだ加藤もそんなに急なこともあるまい。また政友會や、憲政會邊りが、たとひ此の際如何に騒いだにしたところが問題ではない。政友會などは恰かも相撲取りが中氣に罹つたやうなものだし、憲政會と言つてもまた肺病の三期見たやうなもので、到底前途の見込みはなしと來て居るやうな始末、機運は既に業に彼等を去つて了つて居るのだ。即ち當然の歸結として、此の際是非何物か他に有力なものが現れて、更始一新、大に行き詰つた

政局の打開と改造の重任に當るべき事になるのである。その點に於ては山本伯などもまた既に大に考へて居られる事であらうが、まア何れにせよ、是等の點については、四圍の情況等も尙ほよく調査の上、色々また考へても見る事にしやう。』

といふ位の事で別れた。

翌々日の八月十六日となつた。早朝、後藤子からの急使で、一封の書面が届けられた。

『急に面談したい事が出来た。直ぐ一寸來て貰ひたい。』といふ簡單なものであつたが、場合が場合でもあり、直ぐ出掛けやうと思つて仕度をした處へ、また松木幹一郎氏の急使が自動車で走つて來た。それは、

『昨日、貴下に、後藤氏が是非至急に逢つて話したい事があるから、十六日朝早く後藤子宅に來るやう傳へて貰ひたい。』と後藤氏から松木さんの方へ電話がかゝつたので、松木さんの方では頻りに心當りに電話をかけて貴下を探したのだが、遂に判らなかつた

ので、昨夜松木さんからお宅へ電報を打たうとしたのだが、それでも若し遅れて間に合はぬやうな事があつては一大事だ。一その事、明朝早く人を遣る事にした方が確實だ。といふ事で、只今私が使に参つた次第です。』

とて昨夜松木氏が打たうとして書いたのだといふ電報の頼信紙を手渡した。如何にも、

『アスアサハヤクゴトウタイニユケ、マツキ』

と認められてあつた。直ぐ出掛けて午前七時半頃、麻布の後藤邸へ着いた。直に會見すると、子は曰く、

『愈々現内閣も危険に陥り、加藤の病氣も愈々絶望なさうで、一昨日君が歸つた後邊りから昨日にかけて、早くも政友會や憲政會の有力者連が交るゝ我輩の處へやつて來て、是非とも後援して貰ひたいといふから、自分は、それは如何いふ意味か。何か主義政策でもあつて、これで行けば國家が助かる、如何してもこれを行ひたい爲めに

政權を取るから助けろ、とでもいふのなら助けもしやう。然し只だ政權を取るがために援助せよでは困るでないか。また我輩の助ける理由も立たぬではないか。と言ふて返してやつたが、兎に角此の際如何見渡して見ても、此の難局を收拾し、帝國の改造を斷行し得る者は山本が適任だ。是非共伯の蹶起を措いて他に施すべき術がない。就ては自分などは此の際關係になどなつても、ならなくとも、そんな事は別箇の問題として、極力伯の出慮に援助を加へるから、是非とも此の際國家のために伯の奮起が必要だ。これを今即刻に山本伯まで傳へて貰ひたい。といふのが本日君を煩はした所以である。』

といふのであつた。これを傳へる事は勿論自分には何でもなかつた。然し只だ彼れ權兵衛が、いつも必らずお定りの通癖として、少し政變が始まつて來ると、如何なる何人にも絶對に面會を謝絶する例なので、些かそれが氣にもなつたが、最早躊躇し居るべき場合ではない。何としてでも必らず通じて見せると決心して、直に快諾。高

輪の伯邸指して急いだ。

午前十時頃伯邸の玄關先に立つたが、留守といふ事で會へず、直にその足で葉山に財部大將を訪ね、その趣旨を話して至急會見の幹旋方につき依頼した。處がその時財部は、

『本日午後三時頃に、某氏の紹介で長尾半平といふ男が来る筈になつて居るが、君はその人を知つて居るか。』

と言ふので、自分は『知らぬ』と答へたら、

『一つ逢つて置いたら如何か。後藤子の子分と云ふから其關係についても都合がよいかも知れぬ。』とて長尾氏との會見を勧めたが、自分は、

『今更後藤氏云々の必要もないではないか。それにまた誰や彼やと他の者に騒ぎ立てられては、此の際却つて不利益だから、』

とてこれを斷りそのまゝ辭去し、午後三時廿七分かの大船發汽車で大磯に廻り、岡

野敬次郎氏の別墅を訪ねた。が岡野氏は前原と海岸の散歩中とかで不在であつたが、二階に上り込んで歸りを待ち受け一時間も一人で冷しい林を眺めながら今後の策を考へて居る所へ歸つて來た夕食までも馳走になつて色々話をした。さうして權兵衛伯の話の出た序に、

『自分は此の場合、加藤も最早今日か明日かと明瞭に先が見えて居るやうな状態でもあり、此の上最早嘔りつき通すといったやうな醜態を演じなくともよからうではないか。』

とて内閣の總辭職を遜通したところ、彼れ岡野氏は、飛んでもないと言はんばかりの調子で、

『總理大臣がたとひ此の際十日や二十日病氣で休んだからとて、何も總辭職をしなければならぬ理由はない。殊に此の頃は政界も閑散な季節であつて、普通の人さへ暑中休暇で公然と休んで居るやうな時ではないか。』

とて決して然る必要のない事を辯明した。それから權兵衛伯の事に關しては、彼はまた、

『先刻二三回も山本伯を訪問したが、何時も生憎都合が悪くて逢へなかつたが、然し察するところ如何しても伯は出まいと思つて居る。』

と言つたので、直に自分は、

『いや、それは本日も自分は後藤子から山本伯に對する或る傳言を頼まれた程でもあり、且つ今日迄既に有力者三四百名の後援者も出來て居るし、今や空氣は凡ゆる種類の識者を通じて満ちて居るやうな場合でもあり、長年の間接近して見た自分の直觀に見ても、最早國家の大事とでも感知するやうな時でもあらば、伯は必らず出蘆を抗拒するものではないことを斷言する。』

と説き、さうして若し然る場合でもあらば何分の援助を願ふべき旨を約して分れ、同十一時半頃に歸宅したが、當夜は何分にも岡野氏の山本伯出蘆難の話が氣になつて

眠れなかつた。

八月十七日。

夜の明けるのを待たれず飛び起きて、仕度を整へ、朝食もせずに伯邸を襲うたのはまだ七時前であつたが、その玄關先には早くも一足の靴が揃へてあつたので、また復た面會謝絶かなと氣遣ひながら案内を請うた。處が例の今田氏が出て來て取次いでくれたが、

『今出かけるところだから逢へない。』

といふ玄關拂ひである。甚だ残念に思ひ、斯る急を要すべき重大な場合に拘らず、何の用件かも知らずに斯くの如き面會謝絶は、決して伯自身の爲めではない。『これは何としても直してやるべく方法を講せねばならぬ。』と考へながら電車通りに出で、清正公前の停留場附近にある自働電話に入つて、山の内一次氏に電話をかけ、極めて重要な急用があつて、きのふも訪ね、けふも押しかけたのに、例の病癖がまた始まり、

まふと門前拂ひだと頻りに不平を並べ立てながら、

『然し如何でも斯うでも、是非とも早急に逢はねばならぬ要務を帯びて居るので、氣が氣でないのだが、何とか一つ巧い工夫はないものか。』とて智慧を借るべく相談を持ちかけたところ、彼山の内氏も亦た、

『それは弱つたナ。實は自分も少し急な用事を差し控へて居るので、最近再三電話をかけて面會を求めたのだが、矢張り逢へぬので困つて居る。兎に角今話したい事もあるし、方法も協議するから、今これから直ぐ家まで廻つてくれぬか。』

といふので、其の約束をして電話のボックスを出たら、恰かも其の時、今が今迄憤慨の焦點になつて居た當の本人、山本權兵衛伯が、電話の前を、向ふに通り越して居る後姿が眼に止つたのである。何かは以て堪るべき、好機來と心に叫びながら、恰かも親の仇にでも巡り合つたかのやう、『山本伯！ 山本伯！』と連呼しつゝ追跡した。

呼び止められた伯は、些か不審さうな表情で後を振り向いたが、自分といふ事が直

ぐ判つたので、

『また俺をつけ廻すか。』

といふ御挨拶である。それで自分は唯つた今、そのボックスで自働電話を山の内にかけて居た次第を話し、歩きながらの立話ではあつたが、兎にも角にも用向の大事は確かに通することが出来たので、漸く重荷を下した感じがした。併も伯は、

『よろしい。よく解つた。然しなかゝの難局だから、さう易々と君等の思ふやうには行かぬ。餘程の慎重な考慮を要する。』

とて、一二注意を加へるところあり、再會をと思ひ乍らそのまゝ分れた。

八月廿四日。加藤首相遂に長逝し、政界愈々動搖を極め出した。

八月廿五日。松木幹一郎氏よりわざ／＼使の者をよこして、

『去る廿一日から關西の方へ行つて居た後藤子が、明廿六日の朝歸京する筈だから、僕と一しよに東京驛迄出迎へながら、行つて二つ逢つてくれんか。』

といふて來たので、さうする事に約束した。

八月廿六日。自分は自動車で東京驛に着いたのは朝八時頃であつた。一向影が見へぬので遅れたと思ひ乍ら探す様にして居ると後藤 鼻目鏡が見へた後ろから後藤息市藏等が行列して顯はれた。ブラットホームに一旦後藤子を迎へた上、松木氏と自動車を共にして麻布の後藤子邸に行き、直に會見した。さうして自分は、

『遂にいよいよ本調子になつて來て、もう今明日中には後繼内閣の段取りも決定する模様である。併も此の際自分には斷じて外れのない確信を有する者だが、それにしても是非今早急に山本伯にお逢ひを願ひたいと思ふ。』

とて山藤火急の會見を極力勸告した。處が後藤子は、

『それでは今晚にでもお目にかゝるから、都合を聞いて貰ひたい。』

との快諾であるが、又また山本伯の例の惡僻と戰はねばならぬかと思ふと、なかくの難問題のやうに思はれたが、直に引き受けて辭し去り、直に海軍省に財部大將を訪

問し、その歸りに、危ぶみながら早速財部から伯邸に電話をかけて其の都合を聞いたら、これ亦た意外、

『其答へには明廿七日の朝九時頃ならば待つて居る。』

といふ返答なので、直ぐ其の由後藤子方へ通じた。

八月廿七日。前日の約束通り、午前九時に後藤子が高輪の山本伯邸を訪問、會見した。

その日の夕刻、自分は再び麻布の後藤子を訪ね、午前の山藤會見の模様を尋ねたら、子は曰く、

『九時頃に會見、色々と話を交はしたが、まだ誰になるといふ事は一寸確實でない様子であつたと政策上の事等についてはまだ何んにも話はしなかつた。』

なご、極めて不得要領な事を言つて、何時になく多くを語らなかつたが、然しその何とはなしにそはくした彼の様子ど、顔色とは、明らかに他人事でない重大問題

に適當して居る事を感知せしめて餘りあるものであつた。

政友會邊りでは最早既に我が物顔に、閣員の詮衡騒ぎまでも演じて大命の降下に備へ、憲政會一派の如きは躍氣となつて、茲を先途に常道論を擔き廻りに狂奔し出して居るかと思へば、一方からはまた、意外なる第三者が飛び出すかも知れぬ、或は誰だらう。彼かも知れぬ。なぞ、世間の騒がしい事、喧しい事最早極度に達して居た。さうして其の日も暮れた。

八月廿八日。斯くて愈々夜が明けたら、早朝後藤子と田中大將を訪ふた田中不在樺山氏方へ行つた樺山は伯却々困難だから此際清浦子を押して彼れを出し名々の地盤を作らうではないかと主張したが、自分は其の不可と山伯出ると主張し彼れの口止した果然、實に果然、其日午後三時半、山本伯のお召しが傳へられ、大命拜受の號外が、勇ましい彼等の呼聲と、凜々たる鈴の音と共に一時に飛び亘つたのであつた。

嗚呼、何たる此の聲の般はしさよ。鈴の音の美しさよ。疲れ果てたる我が十年の勞

苦は唯だ唯だ此の一瞬を以て癒され、結ばれたる胸の扉は茲に始めてからりと開いた。嗚呼榮光の日本よ。甦るべき國家よ。萬歳の叫びは、頻々として到る祝電と共に、自ら胸を突いて發するの餘儀なきものがあつた。

富坂の罵倒觀樹翁

三浦梧樓將軍の惡口振り

——大正九年春二月——

犬養木堂の紹介狀を持つて愈々天下の變り物、觀樹將軍に逢ふべく、二度ばかり小石川上富坂の邸を訪ねたが、何れも折悪しく逢へなかつた。

その後七八日も経つた頃、不圖また思ひ出した事があつたので、再び例の高田豊川町崖下の犬養邸を訪ねたら、その玄關先に於て、圖らずも此の變り者に出つ會したのであつた。見送つて來た、犬養老も、さも面白さうに此の惡口屋に對ひ、『あア丁度よい。此の間僕が紹介狀を書いた權兵衛論の博士村上君といふのはこれだ。と書面よりも確かな直接の紹介である。すると變り者は『あゝ左様か。よろしい。だがナ、けふは雪見に來たので、政治論に來たのでない。明日にでも來て見るがよい。』とてさつ

さと歸つてしまつた。翌朝は早速に三浦邸指して押しかけた。

家も屋敷も悉く政治道樂に打ち込んで了つて、洒乎／＼として居る老の近頃迄の邸宅は、二千坪にも餘る程の廣大な屋敷で、本郷臺を見晴して森々たる老樹古木の植込、巨巖名石の配ひ等、數寄を凝らした大邸宅であつたが、それを原敬氏の紹介で神田雷藏に賣り渡してしまひ、今ではその屋敷の隅の一角に、さゝやかな居室を構へて悠々人の惡口や、天下の罵倒に日を暮して居る。玄關を入つて一寸右に曲り、二三間も行くど、そこに八疊敷位の茶の間見たやうな、庭も見えない程の座敷があつて、此處が即ち老の惡る口場になつて居るのである。按摩の着るやうな三徳を着て、鮫皮のやうな澁い顔をした彼は、傲然そこに蟠居してまア面倒臭い挨拶などは如何でもよいと言はぬばかりに、

『どうちや天下の形勢は、近頃の原(首相)の評判は如何ちや。』

といふ火蓋の切り方である。さてこそ思ふ壺だと勵聲一番、——

『彼は只管自分の黨勢擴張のみに没頭して、政治政策上何等の見るべきものなく、よし手を觸れても一つとして失敗に終らぬものはない。これ即ち眼中只自己の政黨と自己あるのみで、國家を愛するの誠意を缺くの結果である。今や人心既に政友會を去り、現内閣を嫌忌し、寧ろ國家を私するものであるとさへ極言さるゝに至つて居る。さうしてこれ等の反感が遂に積り積つて所謂危險思想を生み出し、將來國家の最も怖るべき原因になりはせぬかと憂へられる。然も斯の原を引き出すに至つた產婆役は、誰あらうあなたにあるといふ事で、國民の怨恨は今や將にあなたに向つて襲來しつゝあるやうだが、これ等に對しても必らず何事か考があらねばならぬ事と確信する。』と述べた。處が彼曰く、

『ウム同感だ。』と大きく肯きつゝ、――

『原はもと／＼少しも知らなかつたが、青島戰爭時分に、是非俺に逢ひたいといふので四五回使をよこしたものだ。そして逢つて見たら相當の見識も持つて居るやうだ

し、政友會に於ても兎に角一方の親方に立てられて居るやうでもあり、またこれ迄官僚内閣にも幾分厭きが來た時分でもあり、一つ人心を新にする意味で、政黨内閣も面白からうと考へ、其の意見を聽いて見たら、多少の抱負も有つて居たやうにもあり、且つ自分としては、現在第一の急務として軍備の縮少をやらねばならぬと考へて居た時でもあり、彼に對して――先づ參謀本部の廢止が出来るか、あれは徒らに事務を複雑ならしめるもので、何事に依らず陸軍省と折り合はず、國策の進行上邪魔になること此の上ない。――と言つたら、彼は言下に必らず斷行すると言つた。それでそのくらゐなら一廉の事はやれるだらうと思つて彼を引き出すことに力を添へて見たのであつた。』

『處が愈々出て見ると、忽ち二三の人間に睨みつけられて、一溜りもなく萎縮んでしまつた。そして黨勢擴張にのみ没頭して了つた。で俺は言うた。――貴様は何のため黨勢を擴張するのだ。主義政策を實行せんがための政黨ではないか。にも拘らず貴

様はあれだけの多数政黨を揃へて何等政治政策の斷行をやらす、只だ徒らに頭數の擴張にのみ没頭するとは何たる事か。斯くの如きは最早斷じて政治家たるの資格がない。潔く責を引いて隱退せよ。——と言つた。」と本音は愈々吹き出されて來た。そこで僕は——

『それは悉く一切行き詰つて居るからである。彼もまた遠からず辭めるだらうと思ふが、それにしてもこれに代るべき何物か他に適當な器がなければならぬが……』とて其の思ひ當りを訊せば、老は『さアそこだテ』とて咳一咳愈々談を進めて曰く、——『斯うなると、いよ／＼品物がなくなつて來て困るのだ。まア後藤かと思へば、これはまた野心ばかり持つて年中騒ぎ廻つて居るが、恰度子供の植木屋見たやうなもので、朝植ゑて晩に堀り返して見るやうな男で到底物にならず、犬養かと思へば、彼奴はまた營養不良を起して腦味噌が腐れかゝつて居るし、それなら加藤高明かといへば此奴はまたボンクラで一向政權を取る智慧がなく、併も頭の小さな奴で、月末が來る

と、臺所に行つては買物の帳面を披げて女房と攫み合でもやるやうな奴でこれも駄目。また田といへば會社の事務員見たやうな奴で、政治家としての能力がない。して見ると實際役には立たなくとも、矢つぱり原をあのまゝに措いて置くより外に途がないといふ事になるので困る。』といふ。そこで僕は、

『一説に、此の際は非とも山本權兵衛伯を出して見たいものだと言つて居る向もあるやうだが、これは一體如何いふ男か。』と尋ねて見た。一寸消氣かへつて居た老梧樓は再び元氣を恢復したものの如く、——

『ウム彼れか。彼奴はなか／＼やる奴ぢや。彼奴は維新の奴等の中でも、首つ玉の大きな奴で、桂や川上等が何か芝居を始めて居るわいと思つて、幕を窺いて見ると、そこには何時も權兵衛の顔が見えて居た。何の事はない。權兵衛が黒幕になつて居たのである。さうして桂や川上を使つて居たのである。こ奴にやらせたら、原などに言ひつけた位の事は朝飯前にやつつける奴ぢや。此奴はあのまゝ腐らすのは全く惜しい

ナ。薯の中でも一番デカク太つた邸ぢやから喃、何時やらの嵐で一寸は腐りかけたが、芽を出さしてやつたら、こ奴の甘味はまた格別ぢやから喃』と頗る悦に入り、

『權兵衛内閣の出來た時にでもさうだ。彼奴は樞密院などの反對にも顧みず、行き詰つた財政と行政上の大整理をやつつけて、樞密院も貴族院も共に根本から改造してやらうといったやうな事まで目論み、それには山縣が大反對をしたので、とうと山縣の首を樞密院から馘切つたではないか。それで俺が——貴さまは餘り横暴だぞ——と怒鳴りつけたら、彼は——貴様は貴様、俺は俺だ。引つ込んで居れ。——と俺に言ふた。彼奴にやらせれば仕事はいくらでもやる。一つ出して見たいのう。なアに世間で言ふやうなコンミッションを取つたとか何とかいふやうな事實は彼奴には斷じてない事を保證する。彼奴はさういふ事をやるやうな男ではないのだ。當時の事だつたが、ある處で權兵衛に出つくわしたので、俺は指を屈めて、——貴様はこれをやつたか。やつたか。——と言ふた。そしたら彼は牛のやうな眼をして、馬鹿つくな！というて怒つ

た。それで俺も少し可哀相になつて來て——貴様はそんな事やる奴でない。若し貴様がやつたといふて俺に持つて來て見せても、貴様がやつたとは思はぬと賺してやつた事がある。彼奴は俺は好きだ。宮中などでも、彼奴に逢ふのが楽しみな位、彼奴も俺を探して居るし、俺も彼奴を探すのだ。思ひ切つた惡口を言ひ合ふ事もあるが、少しも意に留めない。面には似合はぬ親切なところもある好い男である。』

とて前後四時間に亘る長快談に、悉皆歸るのも忘れてしまつて居た。

松方公の説得を井上元帥に頼む

——大正十一年五月十六日——

愈々高橋内閣も倒れるといふ様子も見えて來たので、早朝井上元帥を麻布本村町の邸に訪ひ、松方公説待方を元帥に懇請した。

元帥は一二世間話や知人の噂などに暫く時を過した後

『權兵衛は全く倉の中に藏つてある玉のやうなものぢや、ソンけれこれはどうしても君等が其の戸を開いて其玉を出さねばならぬ。彼は一旦出ようと決心したら、飽く迄出てやる男であるが、なか／＼容易に動き悪い男ぢやから餘程骨が折れるだらう。』

として自分等にも同情してくれたので、

『實際其の通りです。それにつけても是非松方公に御會見を煩ひたい。』と再び懇請した處、元帥は

『それは我輩では因る。誰か他の者に行つて貰つた方がよからう。俺は未だ現役ぢやからナウ』

と逃げを打つから自分は偏に國家のために枉げて御承引を願ひたき旨を申入れると

『そんなら行つて何と言ふのか。』

といふから、それは斯々とお願ひしたい。』

と答へた。そして元帥は直に、

『よろしい、時機を見て行つてやらう。』

と承諾を與へた。それから自分は、松公に會見する都度政界主腦者の事を聞かれるので話しは致しますが若し貴下からのお話であつたなら非常に有効な話になるのだからとて是非御足勞を煩ひたき旨念を押した。すると元帥は、暫く默考の上、

『イヤ、これは、俺の前から考へて居た事だが、自分の姻戚關係といふこともあり、此の際餘り世間から彼是言はれるやうな事があつては、却つて物を打ち壊す虞れがあ

る、一つ西園寺などに逢つて見たら如何か。紹介する人などはいくらも有らうと思ふが、それは一番然るべき者を考へて、後刻通知をする事にしてもよいが………」と又逃げやうとするので、

「西園寺公には既に加藤恒忠や、竹越與三郎等が紹介してくれる事になつて居る。」

と答へたが、それでも尙ほ且つ彼は、

「それは如何しても西園寺や、清浦に話して見るがよい。」と言ふから

「清浦子はもう既に援助する事に諒解が出来て居る。西園寺公にも必ず逢ふ事に努めるから、松方公の方には是非とも貴下から御會見の程を………」

と無理に頼んで引下つた。

牧野氏と郷男を歴訪す

——大正十一年十二月十六日——

麴町五番町の官舎に宮内大臣牧野伸顯子を訪ひ、談山本伯の事に及んだので、自分は伯擁立の空氣が随分各方面に出て來たことを話し、それから先刻加藤高明子に逢つて「明治維新の鴻業は、要するに薩長の活躍によつて完成されたと言ふべく、然もその樞機に參與し功績顯著なる山本伯を、只だ一片の感情や、政權爭奪の僻事からこれを排斥するが如きは、眞に日本國民のために政治を憂へる所以ではないと思ふ。此の際伯と組んで行くといふ事は、貴下の新道路開拓の途である」と語つてたら同子も共鳴したといふ事を牧野子に語つた。子は答へて曰く、

「君は今薩長の歴史を話されたが全くその通りで、明治の維新といふのは即ち薩長の先輩諸公が、日本を開拓して行くところの指導者であつたのである。今日外交その他

の政策等についても、言ひたい事もあるが、然し自分は宮中府中の別も考へなければならず、政治の事には何も携はることが出来ない立場にあるけれど我國に國難があるとか、或は色々難局に出會することあらば、もう直に山本伯でなければ駄目だ、といふ是非必要な時代があるかも知れぬ。それにまた山本伯は世界の問題に就ても色々意見も持つて居り、相談も出来るといふやうな人は、今西園寺公と彼の人を措いてさう多數はないと考へて居る。シーメンス事件で山本内閣が倒れて以來、彼の人の手腕や人格などを崇拜して居る松田正久男や、奥田義人男の如きは、熱心にあの人を引き出さなくてはならぬと奔走して居たくらゐである。又一般國民の間にも聊か聲が立ち出して居る。それは矢張り目下の内外の状況を觀て、覺つて來たものと思はれる。云々」と語り、それから更に最近思想界の事に關して憂慮されて居る趣きを語られたのであつた。

斯くて宮相宮邸を辭去して、日本橋兜町の東京株式取引所に、郷誠之助男を訪問し

たのはその日の晝過であつた。郷男は乃ち語る。

「自分は君に共鳴して多方面に山本伯論をやつて居る。如何してもあゝいふ風な力のある人が出なければ駄目だと話して居る。先刻も圓琢磨、和田豊治兩君にも話したが、皆何れも同意である。牧野子には自分も亦此の間逢つたが、何でも君の話をして居たよ、中々熱心に餘程以前から山本論を説き廻つて居るとかだ、そしてなか／＼人を動かすことに一種の天才を持つて居るとて感心して居たよ、兎に角實業家側の方は自分等も大に奔走もするし、援助もするやうに努めるから、一つ政治家方面や、元老連の空氣を作る事に極力努力したまへ。先日君が頻りに松方に逢へ／＼といふから逢つて見たら、これ亦た君の熱心にやつてるといふ事を話し、さうして君の話して、加藤高明子や、犬養木堂、後藤新平子等の意嚮がよく判つたと言つて居たよ。それから自分も亦た大に歐洲の經濟や思想から、及ぼす日本の危機を説き、さうして山本伯の如き人物の出馬の必要を論じて來た。處が老公も――俺もそう思うて居るが。然し山

本は出ないだろう。——というて居た。あゝいふ處がなか／＼年は老つても老いぢれ
ては居ない處だ。なか／＼うまいもんだ」

と頻りに感心して居たが更に色々談話を交換して辭去した。

上原元帥と時局を語る

大正十二年七月八日

元帥上原勇作大將を府下大森の邸に訪ひ、例の如く、愈々急迫せる此の時局に、是非とも山本伯蹶^{けつ}起の必要ある所以を話した。處が上原元帥の曰く、

「如何にも彼は明治維新の功勞者として、また膽力、決斷に富んだ政界の大立物として必要ある人物である。恰かも家が傾いて愈々倒れかゝつた際、これを支ふべく突つ張りにする大木は決して普通大底なものでは役に立つべきではない。彼は如何にも其の突つ張り中の最も確乎^{しつかり}した大木である。國家の愈々といふやうな場合、亦た所謂此の大木の大突つ張りが、是非必要でなければならぬ事は云ふ迄もないが、然し今日現在の處では、日本もまだそれ程迄に切迫した危期には面して居まい。」

と、そこで自分は諸名士も口を揃へて急迫して居る事を語れば、彼上原元帥は、

「いやまだ暫らくは餘地があるよ。」と落ち着き拂つて居る。それで今度は、

「此頃聞くところによれば、貴下は床次などを援助してゐられるといふ話ですが、今日の場合床次などが出て内閣を作るなどと考へるやうな者は、恐らく貴下一人位のものではないかと考へられる。先刻も或る有力な政治家がその噂をして居たのを聞いたが、それには——上原は床次を担いで居るさうだ。あれも最早耄碌はして居るといふ事だが、まだ——それ程ではないと思つて居た。——といふて居た」と語つたら彼は怒つて

「誰がそんな事を言つたか。」

と色をなして鋭く言ふから

「それは徳義上言ふわけには行かぬが、一般にさういふ評判が立つて居るやうである」と答へたら、元帥は、

「一體今日の奴等は皆不逞腐れて居るからさういふ事をいふのだ。俺が參謀本部を辭

める時でも、或は西比利亞問題で責任を負つたのだとか、或は支那の武器問題の責任を負つたとかと吹聴して、矢張り腐つた眼で見て居るから、實際とか、真相とか見えぬのだ。床次と云へば、先刻議會などに於てもまるで支那人のやうなことを言うて居るやうな男ではないか。我輩が彼を担いで居るなどとは怪しからぬ事だ。」

と益々怒る。それで自分は更に、

「貴下は床次あたりの後輩を引き出して手先に使ふ。といふ魂膽なさうで、要するに——上原は權兵衛などを出すと、また使はれなければならぬので、それで厭なんだらうと大惡口を言うて居た者もあつた。」

と言つたら、彼は、

「人の口には税金がかゝらぬと思ひ勝手な事を吐かして居る。盲目者は何と言つたつて上原は何處迄も上原だ。」

とて一笑に附して居た。再會を約して歸へる。

横千の元老論

大正十一年十二月六日

午後一時半、横田千之助氏を麴町山下町の事務所に訪問す。二三の談話を交換した後、方今の難局に當らしむる適當の人物は山本伯を措いて他になく又元老に例せしむべき人物も山伯が最適任なる旨を述べた。すると横田氏はこれに答へて曰く、

『それは自分も同感である何を曰ふても此の日本を持ち出したのはあれ等の人々である、それに西園寺公よりは山本の方が國家に對して功積が大きい事は何人も知つて居る、何時迄も西園寺公のみに政治の事を煩はすのも氣の毒でもあれば、また甚だ迂遠なものでもあり、松方公にしても、これまたあの通りに老い果てゝ居るし、どうしても元老の必要を認めて居る自分等としては、此の際矢張り有名有實なる元老を押し立て置くことは便利であると信ずる、併もそれには矢張り山本伯などは當然の適任者で

あらねばならぬ。自分も伯の處にも行つて見ようと思つても居るのだが、何しろ例の鹿兒島鐵道問題の事などもあるので、世人が色々と誤解をするやうな事でもあつては却つて伯に迷惑をかけるかと思つて遠慮して居るのである。行かないでさへ、行つたとか何とかいふやうな噂さへ傳へられて居る始末だから……。』

といふから直に自分は引き取つて、

そんな遠慮などする横田ではない事を説いた所、彼は忽ち其氣になり、

「さうです！」と大きく首肯きつゝ、

「行きます。行きます。二三日中には必らず行つて見ます。」といふ返答。自分もまた、

「それでは權兵衛の方にも其の事を言うて置きますから、」と斷れば、彼亦た、
「是非さう話して置いて下さい。必らず行きますから、」と繰り返した。

濱口雄幸氏と論議す

大正九年十月

大正九年十月の事である。濱口雄幸氏を小石川雜司ヶ谷龜原の墓地に接した墓参者の休茶屋然たる邸に訪問して時局問題から此の難局を拾收し得るものは山本伯あるのみである、貴下にしても亦加藤高明子にしても權兵衛伯を利用する方が良いと思ふと述べた。すると彼れは「加藤山本の兩氏は懇意な間柄ではあるが提携するといふ事は困難である。山本といふ人も維新當時から氣膽大に手腕勝れて居るけれど前に内閣を止める時あゝいふ風にして投げ出して居るし第一政黨の背景を何にも持つて居ないから如何ともする事が出来まい」

と眞向から反對を稱へる。そこで自分は「兎に角今の腐り果てた政友會内閣を倒すには山本伯と聯絡を取つてやるのが一番良いと考へるから加藤總裁にも話して山本に

會つて頂き度い。始めは加藤總裁も山本伯の出慮には反對のやうであつたが」とへば濱口氏は更に

『總裁は別に反對するといふ譯ではないが政黨を持つて居る關係上山本伯の如き者を担ぎに行くといふ事はあるべき道理がない。又自分が會見した所で何等の力もない。君が伯をやつて居るといふ話は脇から聞いた。御苦勞ではあるが伯の出る事は困難だと考へる』

と突つ跳ねる。是に於て自分は更に『清浦、三浦、齋藤、後藤等の名士の意見を叩いた所何れも賛成であつた。殊に觀樹將軍の如きは原に逢つた時參謀本部杯は廢止するといふから總裁になるやう運動してやつたが出てみると山縣に睨まれてすくんで了つた。又憲政會が次の内閣を取つたにしろ何も出来まいから一つ山本を引出して大にやらせてみたい。加藤杯幾ら地だんだ踏んだ所で山本には叶やせん』と言つて居る位である。一つ憲政會であれを擁立しては何うです』とやつたものだ。濱口氏更に

曰く、

『三浦の法螺吹き杯は何を言ふか判らぬ。どうせ眞面目な男ではない。自分では偉さうな事は言つてゐるが近ごろは山縣とも仲がよくないぢやないか。兎に角山本伯を出すといふ事は政黨との聯絡が付かないから駄目だといふより外はありません』

斯くして濱口氏は政黨の脊景なき者は如何なる人物でも相談には乗らないといふ意見を固持し自分は將來は勿論さうなるであらうが今日の日本に於ては山本伯出盧の要ある所以を主張し更に再會を約して辭した。

三浦の法螺吹き杯は何を言ふか判らぬ。どうせ眞面目な男ではない。自分では偉さうな事は言つてゐるが近ごろは山縣とも仲がよくないぢやないか。兎に角山本伯を出すといふ事は政黨との聯絡が付かないから駄目だといふより外はありません。

斯くして濱口氏は政黨の脊景なき者は如何なる人物でも相談には乗らないといふ意見を固持し自分は將來は勿論さうなるであらうが今日の日本に於ては山本伯出盧の要ある所以を主張し更に再會を約して辭した。

